

Fate/EXTRA 外伝 ～
Distract Order～

半裸ーメン

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

EXTRAの主人公（ザビ男）が、本編後にGrand Orderに巻き込まれたら…のお話。

何番煎じかわかないけど、設定は作者の頭のなかで絶賛盛り盛り中。

EXTRAにはない、主人公がひたすら無双するような感じにする（予定）

3 / 15 追記

章の構成とか色々変えました。

基本的にはFate／GOと同じような構成にしていきます。

プロローグく冬木く…みたいな感じで。

目次

プロローグ

#01 Departure | 新た

なる旅立ち | 1

#02 Moratorium | 残

された時間 | 21

#03 Loser | 迷える記憶 |

#04 Days | 束の間の安息 | 30

#05 Limits | 決戦前夜 | 46

#06 Sucks The Beg

60

i n n i n g | 一段目で躓く覇者 |

81

#07 Signs | 災厄の足音 |

105

プロローグ

#01 Departure —新たなる旅立ち—

——焼けた空と、崩れる視界。

——ここは、地獄だ。

忘れない／忘れてはいけない

見るに耐えない／目を逸らしてはいけない

地獄が、そこにあつた。

誰かの声が聞こえる。

——足りない、と。

何が、と私は思う。これだけの地獄があつて、一体何が足りないのかと。

——君は知っているはずだ、と。

また、誰かの声でした。

——ああ、確かに私は知っている。

その答えは——

——欠けた夢を、見ていた。

目覚めると、自分がベッドで寝ていることの方に気が付いた。とりあえず上体を起こして周りを見ようとして——骨が軋む音がした。

ッ!? あたたたたた!?

全身に痛みが走り、私は悶絶した。どのくらい痛かったかと言うと、筋肉痛をさらに酷くした感じ。10倍くらい? なったことなので分からないけど。筋肉痛。

体が重い。まるで、生身の体のような、全身の筋肉が衰弱しきっているかのような、そんな感覚を覚える。指一本動かすにも激痛を伴うが、まずは自分がどんな状況か知る必要があるので、覚悟を決めて首だけでも回す。

雰囲気としては、保健室、というより病院に近い。

真っ白な壁に薬品特有の匂い。結構なお値段がしそうな機械も沢山置いてある。医療機器的なものだろうか?

ここは、どこだろうか?

そう考えても、答えは出ない。周りに人もいないので、聞くことも出来ない。どうしようかと悩み始めたその時、

ウイーン、と呑気な音を立てて誰かが部屋に入ってきた。

「!」

入ってきた少女と、目が合った。

すると少女は、

「ドクター!目を覚ましています!」

と、安堵の表情を見せた。

続けて、今度は男性が部屋へと入る。

「ホントだ!良かったあ…!もう目を覚まさないんじゃないかって、心配だったんだよ?」

…どうやら二人は、自分の心配をしてくれていたらしい。本当に心配してくれていたのが、その表情から分かってしまう程に。

その反応について顔が綻んでしまう反面、大変申し訳ない気持ちになる。

「先輩、どうしました?顔色が悪いですよ?」

少女が私を見て、そう尋ねてくる。

本当だ、バイタルチェックしないと、と言いながら準備を始める男性。…やだ、冷や汗が止まらない。

この二人は、私のことを知っている。

そして、かなり心配してくれていたことから、比較的親しい関係であることが予想される。

それ自体は嬉しい。非常に嬉しい。嬉しい、のだが…。

——残念な事に、私は、彼らのことを全く知らないのである。

どうしようどうしよう!? こういうのは、素直に言い出すべきなのか。それとも、ああもうわからないっ! いろんなことが一気に来て、完全にパニックである。

——と、そんなことをしている間に、バイタルチェックが終わったようだ。男性がこちらへ向き直って笑顔で言う。

「体調は問題なさそうだね。それにしても、本当に顔色が悪いね…何か、すごい汗もかいているみたいだけど」

「…先輩、やつぱりどこか体調が?」

ジィ〜つと。少女が見つめてくる。

私の顔に穴が開きそうなくらい、真剣に見つめられる。男性の方も同じように、視線を投げてくる。何よりも心苦しいのは、二人が心配しているのが痛いほど分かってしまふことだ。

……………。

そろそろ、覚悟を決めなければいけないようだ。

私——岸波白野は、正直に、真摯に、言葉を紡ぎだした。

「……………つまりキミは、2030年からタイムスリップしてきたと、そういうこと？」

男性——ロロマニ、通称Dr. ロマンがそう尋ねてくる。

「驚きです。先輩は、頭でも打ったんですかね」

何て軽口を叩く少女——マシユに私は、心のなかでツツコミを入れておく。

…まあ、到底信じられる話ではないのも理解しているつもりなのだが。

「そうだね。素直に信じろ、という方が難しい。今の話は分かりやすく胡散臭いね、岸波くん」

「ええ。ですが先輩は、この状況でそんな冗談を言えるような人ではないことも確かです、ドクター」

私の話を総括すると、2030年——魔術が衰退し科学が世界の中心となった世界

で、己の魂を靈子化し電腦世界へ送り込むことが出来る者たちを魔術師と呼ぶ。その魔術師達の中でも優秀な者を招き入れ、行われた月の聖杯戦争。そこに私もマスターとして参加し、そして勝利した。

沢山の人と出会い、友人を得て、幾度の死線を乗り越え、遂に聖杯と呼ばれているモノにたどり着いたのだ。

「…で、気が付いたらここで目が覚めた、と」

コクコクと首を縦に振る。本当のことなので、そんな可哀想な人を見るような目はやめて欲しい。

ちなみに、今の私は上体を起こしている。マッシュに手を貸して貰ったのだが。

まだ体は硬いが、何とか手を動かせる程度には回復していた。

「仮にその話が本当なのだとして、元々この時代にいた先輩は一体どこへ行ってしまったのでしょうか」

この時代、という言葉聞いて思い出す。

そういえば、ここは一体どこなのだろう？

「…話を信じる訳じゃないけど、一応現状を知ってもらおう必要はあるかなあー。岸波くんであることには変わらないみたいだし」

そう言って、ロマンは話し始める。

2015年、人理継続保障機関・カルデアは、人類の未来を観測しそれを存続させるために設立された特殊機関らしい。近未来観測レンズ・シバを用いて人類史の未来を観測、その存続は100年先まで安泰シバのはずだった。

しかし、唐突にシバによって観測されていた未来は消滅し、2016年には人類の絶滅することが判明。いや、証明されてしまったそうさ。その後、人類絶滅の原因と考えられる『観測不能の領域』が過去の歴史から発見された。過去への時間旅行。レイシフトで過去へ飛び、『観測不能の領域』の修正を行い人類の未来を取り戻す。今は、その為の準備段階なのだそうさ。

私、岸波白野はレイシフトする魔術師達の中でも、一般枠（いわゆる補欠みたいなもの）として参加していて、コフィンと呼ばれるレイシフトを実行するカプセルのようなものについての実機訓練中の事故で、コフィンが誤作動を起こし気絶してしまったところを医務室に運ばれたらしい。

「うん、説明してて思ったけど、岸波くんはレイシフトして未来から来たのかと考えちゃったよ、あはは」

と、笑うロマン。

「そうですね、仮説としては面白いものですが、流石にその可能性は低いと思われます」と、微笑むマシュ。

……意外に近いのかもしれない、と背筋がゾクツとした私。

その寒気を払いつつも、とりあえずの現状は把握した。まとめると人類絶滅の危機。うん、いつものことだ。そう思うと、私は大分落ち着きを取り戻した。

「お、おう……何だかいつも通りみたいな顔してるね……」

だって、いつも通りだし？月の裏側での戦いの時なんて……

と、思い起こそうとしたときとんでもない違和感に気付いた。

聖杯戦争では、マスターが直接戦うのではなく、サーヴァントと呼ばれる使い魔のようなものとの契約し、マスターの代わりに戦う。

サーヴァントとは、ざっくり言えば歴史上の英雄など生前に偉大な功績を残した人、だったと思う。

そして、マスター一人に対してサーヴァントは必ず一人なのだが……。私には数人のサーヴァントとの記憶が存在している。

同時に複数のサーヴァントと契約していた、なんて記憶はない。そもそも凡庸な魔術師である私に、そんな真似は出来ない。サーヴァントは、マスターと契約し魔力の供給

を受けることで存在することが出来る。一人のサーヴァントでさえ魔力供給でヘトヘトになるのに、複数のサーヴァントとの契約など、現界させるだけならまだしも戦闘ともなれば一分足らずで魔力切れしてしまうだろう。

ならば、何故こんな記憶があるのか。

——可能性、の話。

月の聖杯、ムーンセルとは、人類の歴史を記録するために、記録媒体として光を使う未知の技術で作られた観測機だった。

光を閉じ込める熾天の檻は人類の観測と同時に、『あり得たかもしれない可能性』を演算し記録していた。聖杯に触れた際に、もしかしたら他のサーヴァントと契約した『もしもの聖杯戦争』という可能性を視てしまったために、こんな記憶があるのかもしれない。

だが、そんな可能性の記憶などではないと、信じている自分がいた。だから、多分きつと、この記憶は本物なのだろう。

赤いドレスを纏う男装の麗人

赤い外套の弓兵

狐の耳と尻尾を持つ良妻系巫女

人類最古、英雄の中の英雄王

彼らとの記憶は、今の自分の魂の一部なのだ。

そう信じることにした。この謎はその内分かるだろう。それよりも、今やるべきことは――

――さしあたって、私はここにもいいのだろうか？

どうやらこの時代の私と今の私は、人となりはどうであれほとんど別人だ。そんな、部外者みたいな人間がいても良い場所でもなさそうなのだが……

「うん？ いいんじゃないかな、このままでも」

えっ

「だって、記憶はどうあれ岸波くんは岸波くんなんだし……一応最低限の知識とかは学んでもらわなきゃだけど」

「はい、そこまで問題はないかと。人手は多いに越したことはないですし」

――一瞬、言葉を忘れた。

人間の、暖かい部分に触れた気がした。

ふと、あの時のことを思い出した。

人形ドールを従え、人形ドールに敗れ、命の終わりを感じながら——それでもなお、諦めたくない顔ドールを上げることをやめなかった自分に、

——その足掻きが美しい、と

——その行き汚さは自分に似ている、と

——その魂に一目惚れした、と

そう言つて、手を差し伸べてくれた彼らとの始まりを。

自然と、涙が頬を濡らした。

「ちよつ先輩!?! どうしたんですか!」

マシユがびつくりして、あたふたしている。そんな様子、がちよつとあの白衣の後輩とダブった。

そうしたら、また涙が溢れてしまった。

何だか涙脆くなつてしまったみたいだ。

「あわわ、ドクターどうしましたしょう私のせいでもた先輩があ!?! わ、わたつ私、何か先輩が悲しむようなこと、しましたか…?」

そんなマシユを見ていたら——

——大丈夫、マシユはそんなことしてないよ。

そう言つて、マシユの頭に手が伸びた。
なでなで…

「っ……………」

マシユは一瞬ビクツと肩を震わせて、そのまま俯いてしまった。そんな姿が愛らしくて、つい…

ナデナデエ…

「せつ先輩…恥ずかしいです…」

彼女から抗議の声があがる。その顔はリングみたいに真っ赤で、潤んだ瞳で上目遣いで…ますます桜と被つてしまう。

「……もしかして、イヤだった？」

冷静に考えると、見知らぬ人同然の私に頭を撫でられるのは女の子的にはどうなんだろう？

「…いいです…」

？

よく聞こえなかった。

「イヤ…じゃ、ないです…。むしろもう少し続けて欲しい…くらい、です…」

ふふん、そうだろう。

なんたつてローマのちんまい皇帝さまを満足させるほどですので、はい。

そうこうしている間も、なでなでは継続中だ。

「んっ…ローマの、皇帝…?」

可愛い後輩とのスキンシップをしていると、

「ごっほん、いいかな?」

ロマンがわざとらしい咳払いをした。

マシユはまたまた顔を真っ赤にして、座り直す。かくいう私も、ちよつとやり過ぎたと反省はしている。

「とにかく、岸波くんには明日から訓練を再開してもらおう。改めて魔術適正とかいろいろ検査しなくちゃいけないしね。ただ、今日はとりあえず休んだ方がいいと思うんだ。環境が違うし、整理したいこともあるだろうしね」

確かにロマンの言うことは正しい。

今のところはここにいて良いということだが、いつ立場が危うくなるかは分からない。そうなったときに、一番危ないのはマシユとロマンだ。

…自分のせいでこの二人に迷惑をかけることだけはしたくない。

するとそこへ、新たな人物がやってきた。

「ロマン…ああ、いたいた。

マシユも一緒かい？」

「やあ、レフ。ボクに何か用かな？」

「残念ながら、用があるのは私じゃない。所長が騒いでいたぞ、『またロマンはサボりかー!!』って。後で愚痴を聞かされるこちらの身にもなつてーおや、そちらの少年は…?」

「げ。や、やだなあ、ボクは別にサボっているわけじゃ…」

レフと呼ばれた青年が、こちらを見る。

明るく気さくそうな人だ、と思った。

「レフ教授、こちらは岸波白野さん。先ほどコフィンの誤作動に巻き込まれて、気絶してしまい医務室へ運ばれた方です」

マシユが、私のことを説明、してくれた。

「ああ、君が噂の…。話すのは初めてだね、私はレフ・ライノール」

雇われの技師だよ、と最後に付け加えた。

どうも、と小さく頭を下げる。

「一般枠の最後の最後に滑り込んだって聞いてたから、どんな子だろうと思っていたけれど…意外と普通だね」

「教授、それでは先輩に失礼です」

「ああ、ごめんね。」

別に悪気はないんだが、カルデアってやっぱり気難しい人が多いから、君のようないかにも『普通』って感じの人は珍しくてね…。気を悪くしないでくれ」

これからもよろしく、と差し出される右手。

——大丈夫、気にしてない。

そう、一言返す。それが、限界。

「教授、先輩はまだ体を動かせる状態ではないのです」

っ、確かにその通りではあるが。

瞼の裏に、学校の廊下での出来事がフラッシュバックする。

——ユリウス・ベルキクス・ハーウェイ。

「そうだったのか、これはすまないことをした。」

では、私はこれで。ロマニは早めに彼女の機嫌を取りに行つた方が良さそう。マシユも

そろそろ時間じゃなかったかな？」

そう言い残して、レフは医務室を後にした。

「そうですね。ドクター、私達もそろそろお暇しま…先輩？」

心臓が、悲鳴を上げていた。

ユリウスと初めて対峙した、漠然とした圧迫感。そしてそれが、自分一人に集束して、明確な殺気へと変わる瞬間。

あの男、レフ・ライノールからはユリウスのそれに近い、だが明確に異なる。何かを感じた。

……息が、整っていく。

手足は、動く。問題はなさそうだ。

「……先輩、大丈夫ですか？また顔色が……」

大丈夫、と弱々しく笑う。何かの間違いだと、自分の頭を誤魔化する。

あんなものは、間違いだと信じる。

……少しは気分が戻ってきたようだ。

今までぶつぶつとサボってた言い訳を垂れ流していたロマンが、急に動き出した。

「とりあえずっ！岸波くんは今日一日休むことっ！いいね？」

その結論に特に異存はない。

整理したいことがあるのは事実なのだから。

「ボクは先に（怒られに）行くけど、岸波くん自分の部屋は覚えてる？」

はて、マイルームなら□ボタンから選択して……

「覚えてないんだね／ですね」

……返す言葉も御座いません。

ふ、二人でハモらなくたっていいじゃない！

「じゃあマシユ、悪いけど岸波くんを部屋まで送っていつてくれないかな？」

「了解です、ドクター。お任せください」

任せたよ、と言ってロマンも医務室から立ち去ろうとする。

その背中に、

ありがとう、ドクター。

と、声をかける。

するとロマンが、振り返って笑う。

「そこでそういうことを言えるってことは、キミはボクらの知ってる岸波くんなんだよ、やっぱり」

……今度こそ行ってしまった。

何か締まらないなあ、と私も少し笑う。

「私もそう、思います。先輩は、変わらない先輩なんだって」

そこで、自分の顔が熱を帯びてきたことに気付いた。

マシユも吊られて、顔をまた真っ赤にしてしまった。

照れ隠しに、そろそろ部屋へ行こうかと提案しようとする。

と、

「先輩、そろそろ部屋に…」

……………。

「……………」

完全にタイミングが重なった。

何故だか可笑しくて、二人で笑い合った。

何だか、今日はよく泣く日だな、なんて思った。

…そんなこんなで自室に到着。

他愛ないやり取りの間に、体の痛みにも慣れてきたようである。

そもそも私自身、痛みに慣れているところはあるのだ。

毒に蝕まれたことも、分解されかけたことも、生きたまま潰されそうになったことも、名前も自分も忘れ去りそうになったことまである。死にかけてしたことなど一度や二度で

は足りないのだ。

大概の痛みなど、無垢心理領域で受けた衝撃に比べれば大したことではない。

——但し、それは電脳空間^{SE, R.A. PH}での話だ。

実際の肉体での痛みなど、体感したことがない。

言うなれば、痛みの種類が違う、というか痛みの感じ方が違う、という方がしつくり来る気がする。

要するに、体験したことないから慣れるのに時間がかかっただけのお話。

「……じゃあ私はこれで失礼しますね、先輩」

お大事に、と立ち去ろうとするマシユに、私は今まで伝えられなかった言葉を——

——ありがとう、マシユ。

こんな自分を信じてくれて——

心からの感謝と、

——これからも、よろしく。

素直な気持ち传达了。

「——はい。どういたしまして」

マシユも、笑って返した。

パシユツと小気味良い音を立てて、ドアが開いた。マシユは行ってしまった。

これからやらなきやいけないことはたくさんある。

が、ひとまずは――

――寝よう。

オフトウンには勝てなかったよ…

#02 Moratorium —残された時間—

翌日からは、毎日ロマンと一緒にいた気がする。基本的には、ロマンの助手みたいなことをやっていたからだ。

「いいかい、岸波くん。今回の作戦は2004年——日本の都市、冬木に新たに観測された『観測不能な領域』、特異点ヘレイシフトし、人類絶滅の原因となる要因を修正又は排除することが目的だ。」

「しかし、特異点が現在どのような状況になっているのかは誰にも分からない。観測不能、なんて言われるくらいだからね。」

「実際に特異点へ人間を送り込んでみないと、観測することさえ不可能なんだ。」

「レイシフトした人間も、絶えず情報を観測することで意味消失を防ぐ必要がある。」

ロマンは「特異点」について、そう説明した。

何だか虚数空間と似ていると、直感的にそう感じる。

虚数の中では、あらゆる情報が観測できない。

故に中へ入る人間を基準として、相対的に観測しなければならぬらしい。場所や距離すら、測ることは難しいのだ。

「虚数空間っていうのは何か分からないけれど、よく知っているね。その通り。確定した事象が存在しなければ分からない、びつくり箱つてところかな。」

バックアップを行ってくれた生徒会のメンバーが優秀なのもあるだろうが、自分は相当危ないことをしていたようだ。

月の裏側では、それが当たり前になつていたので忘れていた。

必要最低限の知識を叩き込まれた後は、身体能力・魔力量・レイシフト適正などさまざまな検査、基礎的なトレーニングや模擬戦闘シミュレーションを朝から晩までやらされた。

検査の結果、自分は『魔術回路』サイキックを持つことが判明した。2030年とは何もかも違うこの時代でも、魔術師を名乗れることに胸を撫で下ろす。

しかし、月にいた頃と変わらず自分は魔術師としては凡庸なままだ。回路の質と本数は、”一般人としては”かなり良い方らしいが、当然本職には敵わない。

それでも数々の経験からか、治癒・強化・回避の三種類の魔術だけは何とか会得することができた。

それでも、本当に初歩的なものでしかないのです、所長からは

「…ふーん。で？」

で終わった。

——余談だが、ムーンセルで使用していた礼装——コードキャストに関しては、まったくうんともすんとも言わなくなっていた。この時代の“魔術”とコードキャストでは、理論としては似通っているのだが触媒とするものが全く異なるので、発動できないのは当たり前なのかもしれない。

このカルデアの所長、オルガマリーは結構な名門の生まれらしく魔術師としてはかなり優秀なのだそう。ついでに言うなら、何故だか自分のことをやたらと目の敵にくる。

理由が分からないのでこっさりマシユに聞いてみた。もしかしたら、以前の自分が何かやらかしてしまっただのかと考えたのだ。

しかしマシユには

「先輩、覚えてないんですか？」

所長の講議の最中に、おもいつきり睡眠を取るといふ傍若無人な振舞い、しかも最前列中央のドセンターで！」

……そういえばそうだった。

その後、ハイキックで三メートルほど飛ばされて医務室へ運ばれたのは良い思い出。あの日は自分がカルデアへ来て二日目で、絶え間なく眠気が襲ってきていた。

そこへ、朝の8時から所長のありがたい講義。

開始五分前には管制室へ行つたにも関わらず、空いている席があそこしかなかった。最早不可抗力としか思えない仕打ちだ。

但し、レイシフト適正があると判明したときは流石の所長も声をあげた。……主に非難の声だったのはこの際良しとする。

「何でアンタみたいな半人前の魔術師に適正があつて……ブツブツ」

最後の方は声が小さくてよく聞き取れなかったが、何と言われているのか聞こえなくて良かったとさえ思った。

正直ホント怖かった。あんなに怒っている人には出会つたことがない程に。一瞬、所長の背後に鬼が見えた気がした。

後からロマンに聞いた話だが、レイシフトとは術者そのものを霊子化し、過去へと送

るものだそうだ。

魂を霊子化して電子世界へハッキングを仕掛ける「霊子ハッカー」なんて呼ばれていた自分——正確には違うのだが——に、適正がない方がおかしいとさえ思う。

問題は、——所長にはその適正さいのうがなかった、という部分だ。

カルデアはただでさえ、その存続が危ぶまれている状態らしい。『時計塔』という組織から、再三プレッシャーをかけられていて、今回の作戦で何かわかりやすい結果を残さなければ、即座に解体される可能性すらあるという話だ。

人理の存続を目的とした機関でありながらその目的を果たせず、起死回生の作戦に所長である彼女自身が参加できない。

きっと、そうやって言われているのだろう。そんなストレスに彼女が耐えられるだろうか、いやない（反語）。

そんな人生の瀬戸際とも言える場面で、自分には作戦に参加するための資格さえない、となれば誰だつて投げやりになってしまうのは仕方のないことなのかもしれない。

それでも彼女は、人類存続のためにこの作戦を他の人間に託す、と言ったのだ。その覚悟は、並大抵のものではないだろう。その覚悟に報いるためにも、自分達は結果を出

さなければならぬ。その為に、彼女は他人に強く当たってしまったのだろう。

：まあ、ほとんど八つ当たりに近いのは事実なのだ。主に自分とロマンへの。矢面に立って、誹謗中傷に晒されているのは確かなので、彼女の胃に報いるためにも…何としても成果をあげなければ！でもやめて欲しい。

ロマン・アーキマンという男だが、彼は非常に優秀だ。

それは誰もがローアの所長でさえ認めていることだ。

しかしながら、数日間彼を見ていて分かったことがある。

彼は、サボリ癖が非常に悪いのである。

まあ、大体が所長の八つ当たりが原因なのだ。

昨日のことだが、所長に呼ばれて管制室へ向かった自分とロマン。

管制室では所長が待っていて、現場で些細なミスが三つ以上重なる

「貴方達二人がいると気が緩むのよ！」

何て言われて、追い出されるのが最近のオチだ。その後は、二人で自分の部屋へ行きしよぼしよぼと語り合う。おかげで、ロマンのことなら大体わかるようになった。自分も、おいそれと他人に離せないようなことも話してしまっていたりする。

そうしていると、サボリと見なされてまた怒られる。

無限ループって怖いね。

あの日以来、レフ・ライノールとは会っていない。

あの時感じた違和感が勘違いであると信じるためには、もう一度会わなければいけない。

レフとマシユはどうやら行動を共にしているようで、マシユもとほとんど会っていないのが現状である。

マシユは作戦時には一番最初に”特異点”へレイシフトし、霊脈を探し出して召喚サークルなるものを設置する、Aチームに所属している。

Aチームとは、レイシフトを行う48人の中でも成績？上位者10人のことを指す。言ってしまうと上から出来の良い人達のことだ。

このAチームの役割が”先陣”、すなわち特異点の安全を確保することから最も危険に近い。可能ならば、自分も一緒に行きたい。しかし、凡庸な魔術師でしかない自分には、難しい話であることも理解しているつもりだ。

また、自分よりも劣る魔術師に心配されても意味がない、なんてことも分かっている。

る。——それでも、マシユに危ない目には遭つて欲しくないのだ。

なんて図々しい人間なんだろう、自分は。出会つてたつた数日の、赤の他人と言つても問題ない程度の関係なのに、身勝手に『危ない目に遭つて欲しくない』だなんて。

だが、そのくらいが丁度良いのかもしれない、なんて思えた。

自分にとっては、その程度でも『諦めなたくない』理由になる。

個性と呼べるようなものは何一つ持たず、ただ諦めが悪く惨めに足掻くことしか出来ない岸波白野しほという存在。

故に、決して下を諦める向くことだけはしなかつた。それしか出来ないのなら、せめてそれだけは貫こうと。

そういう生き方を、選んでいこう。

月の裏側へ落とされた時も、そうだ。自分はただ諦めたくなくて、あの熱を無意味なものにしたくなくて、——ただそれだけで、虚数の海へ飛び込んだ。

不確かな記憶を思い起こしながら、自分の質の悪いところは諦めの悪さではなく、それが周りに伝播することかもしれないと、頭をよぎつた。

ただ前を向いて、前へ進む。

ゆつくりと、しかし止まらずに。

そうしているうちに、仲間が隣を歩いてくれた。

レオ、ユリウス、凜、ラニ、桜、ジナコ、シンジ、ガトー。
そして、自分のことを最後まで信じてくれたサーヴァント^{バーヴアント}。

それを、あの健康管理AIと同じ顔を持つ少女は気味が悪いと言った。

立てる筈がないのに、立つ意味がないのに、どうしてそこまで諦められないんですか？と、問い掛けられた。

：理由なんて、それこそ単純だ。

この手は、まだ拳を握れる。

この足は、まだ立ち上がれる。

この体は、——まだ諦めることは出来ないと訴えている。

それだけで十分ではないか。

やれるだけのことはやろう。自分に何が出来るかなんて、難しいことを考える前に。

彼女に、^{マッシュ}してあげられることをしてあげたい。

そんな気持ちを胸に——^{さいしゆうび}作戦前日を迎えた。

#03 Loser — 迷える記憶 —

今日は大事な作戦が控えていることもあり、全員に一日の休息が与えられた。所長の粹な計らい、という名の言い訳殺しである。

恐らく、明日からはほとんど休息など取れないのだろう。

もしかしたら、最期の休みになる可能性だつてあるのだ。心残りが無いよう、趣味に没頭する者、大切な人と過ごす者、朝からずっと寝ている者、はたまたいつも通りの生活を送る者など、みんな思い思いに過ごしている。

自分がカルデアに来てから、こんなに穏やかな日はなかったように思える。

……実際その通りではあるのだが。

こんなとき、比較的——というかほぼ無趣味な自分を殴りたい衝動に駆られる。やることがない。

一人でいることは嫌いではない。嫌いではないのだが、それにも限度がある。

流石に物音一つしないのは、静かを通り越して不気味と言わざるを得ないだろう。

自室でインスタントのコーヒーを飲みながら、記憶の波にさらわれる。

そういえば、今まで完全に一人になったことつてないんじゃないか？

ムーンセルでは、マイルームという個室が与えられていたが、基本的、というか根本的にサーヴァントと一緒にするのが常である。それはそれで、慣れたら落ち着くのだが。

記憶にある、サーヴァントとのマイルーム…。

褒めて良いぞ？とドヤ顔で頭を向けてくる赤いの。

口を開けば小言の絶えない小姑。

二人きりになった途端に大胆になる駄狐。

適当な会話から即死エンドを繰り返す慢心王。ジャイアント

…何だろう、マイルームなのに全然気が休まっている気がしない。

しかし、それが返って良かったのかもしれない。

彼、彼女らが普段通りに接してくれたおかげで、自分もまた普段通りでいられたのだろう。そう思えば、実に有意義な時間だった。失って初めて大切なものに気付く、というのはいくことなのかも。

ただ、他の女の子（主に凜とラニ）と話した後のマイルームは、中々に刺激的だった。英雄色を云々、なんて言うのは的を得ていると感心せざるを得ない。

そうやって今までのことを思い返していると、段々と不安が足元から這い上がってくる。

ずっと先送りにしてきた問題が、自分の心を蝕んでいる気がする。

——どうして、こうなったのか。

月での記憶を持ち、ムーンセルに触れたことまでも覚えていて。にもかかわらず、現在こうして生身の肉体で生活しているのか。

月の聖杯戦争に参加していた自分は、現実じくたいを持たない虚構にせものの存在だった。

かつて実在した人間を元に作られたNPC——聖杯戦争を円滑に進めるためだけにムーンセルによって生み出された下級AI、それが岸波白野しづなだ。

何らかのバグで自意識を持ち、聖杯戦争へ参加してしまった自分は、名前以外のあらゆる記憶を失っている——と、勘違いしていた。

自分には、最初から何も無いのだ。聖杯戦争以前の記憶も、聖杯にかける願いも。願いとは執着。有るのと無いのでは、まったく違う。

強い願いには、強い意思が伴う。

誰もがどんなものであれ、命を懸けて叶えたい願いのために戦う、そんな中で自分は場違いな存在だった。

最初は、何も分からないまま死ぬのが嫌で。

自分が死にたくないから、間桐^{かつての友人}シンジを…。

どんな結果であつても、受け止めろと言つたダン²・回^回戦^戦の^対戦^者者^者。ブラックモア。

どんなものであれ、何か願いを見つけて欲しいとも。

何も分からなくとも、いや分からないからこそ、前へ進むことしか出来なくて。

最後は、空っぽだった自分^{自分}に出来た、ちっぽけな願いのために。

幾多の命を奪い、

数多の願いを破り、

偽りの自分の中に芽生えた、本物の願い。

願いに優劣などなく、故により強い願いを以て他の願いを淘汰してきた。

そして、救世者^{セイヴァー}とトワイ^{自分}イス・H・ピース^同スマン^{存在}すらも打ち破り、この聖杯戦争に終止符

を打つた……。

……筈、なのだが。

聖杯に触れ、願いを入力したところまでは記憶がある。

そして、自分の元となった人間^{岸波白野}が、実はまだ生きていることが分かった。

当時の医療技術では不治の病とされていた病気を患っていた彼は、未来に一縷の望みを託しコールドスリープ、すなわち冷凍保存されていたのだ。

自分は、その病気の治療法と共にコールドスリープの解除コードを、彼へ送った。自分の代わりでは無いが、彼に今の世界を歩いて欲しい。

そう、望んだからだ。

データだけの存在である自分は、ムーンセルに触れば不正なプログラムとして削除される運命にあった。

ムーンセルに触れられるのは、生身の体を持つ人間だけだ。

月の勝者である自分は分解され、ずっと眠っていた彼は目覚める。

それが結果でなくてはならない。

勿論彼に月での記憶など残る筈がない。彼は彼として、2030年の未来を歩んでいくのだ。それは、自分の物語ではない。

しかし現実存在しているのは紛れもなく、月で足掻き続けた岸波白野であることが、真実。

――可能性としては、二つ。

一つ目は、2030年からのタイムスリップ。

何故かは分からないが、コールドスリップしている岸波白野に、月で戦った自分が複製された、或いはその記憶が受け継がれた状態で、この時代へ飛ばされた可能性。

しかし、これには2015年に存在した岸波白野の消息についての謎が残る。

更に言えばムーンセルであっても、電子世界を通じて記憶を植え付けたり上書いたりするならば可能かもしれないが、タイムスリップやレイシフトのようなことは不可能だと思われる。

二つ目の可能性は、時代の修正である。

ムーンセルは、無数の可能性を演算・記録している“管理の鬼”である。貯蔵している魔力量も相当なもので、願望機と呼ばれるのに相応しい。

伝説に語られる聖杯との一番の違いは、その効力だろう。

ムーンセルには、今すぐ世界を滅ぼす、なんて力はない。

ムーンセルは人類史に干渉し、ムーンセルに記録されている無数の『あり得たかもしれない未来』の中から、選択された一つの歴史を再現する。即効性こそ無いが、過去からの歴史ごと歪めることが出来る。

この能力で遙か過去から歴史へ干渉し、現在の2015年が創られ、そこにいた”岸波白野”へ自分が上書きされた。

一つ目よりは地が足がついていると思う。

だが、理由がない。

2015年の”岸波白野”を上書きする、その理由。

また歴史に干渉するには、自意識を持つ人間が命令しなければならない。——聖杯へ飛び込んだ時、自分とサーヴァント以外は誰もいなかった。自分達に、そんなことをする理由はない。

ムーンセルそのものに自意識はない。

長い間孤独に未来を計算し続ける中で、ムーンセルには何度も自意識が生まれていくらしい。

歴史を思うまま歪めることが出来る機械に、自我が芽生えてしまったら、どんな未来を選ぶのか想像もつかない。

しかし、ムーンセルは『観測機』である。

作られた目的は、『人類の観測』にある。

『観測』に、自我なんてものは必要ない。むしろ、目的の障害でしかないのだ。

そんな邪魔なものを、『管理の鬼』が見逃す筈はない。

生まれてすぐ、もしくは生まれる前にその芽を摘む。そんなことを永遠に繰り返している。

だからこそ、『観測』し続けることが出来るのだ。

ムーンセルに自我はない。自分達でもない。

であるならば、一体誰がそんな歴史を望んだのか。

その疑問に見合う解答を、今の自分には出せそうになかった。

考えても分からないことは、考えない方がいい。

そういう結論に達した。逃げてるんじゃないよ？ホントだよ？

そもそも考えるのは凜やラニ、桜、レオ、ユリウスの仕事だ。生徒会ではそうだった。肉体労働アーリーナ探索が自分の役割であることを、ようやく思い出した。

改めて言えば、生徒会の役割分担はよく考えられていた。ん？ウルトラ救道僧ガトリー・モンジはトイ

レ掃除係という立派な役職に就いていたじゃないか。

自室にいても妙な静けさで落ち着かず、一人でいると変に考えてしまう。

この良くない空気を変えるため、部屋を出ることにした。

現時刻は午前10時過ぎ。外の通路には、昨日まで慌ただしく走り回っていた研究者達の姿はない。彼らも彼らで、好き勝手に過ごしていることだろう。

部屋から一歩出ただけなのに、何だか晴れやかな気分になった。さつきまでの陰鬱とした空気など、なかったかのようだ。

特に目的もなく居住区を練り歩いてみる。

思い返すと、カルデアでの生活は検査と訓練の繰り返しで、ともに案内すらされていない。人類存続をかけた大きな作戦の直前で、しかも自分は元々ここで生活していたのだ。そんな人間に施設を案内するような奇特な人間がいる訳が——いた。

一人、そんな人間に心当たりが。

ロマン・アーキマン、その人である。

…あれは2日ほど前のことである。

例に漏れず、所長からの怒声により自分達は管制室から叩き出された。そして、これもまた例に漏れずサポータージュのため医務室へ向かう道中、ずっと気になっていたことを

聞いてみることにした。

…あの扉は何なの？

見た目にも結構な厚さの扉。あの扉の向こうへ行く人は、必ずと言って良いほど思い詰めたような顔をして入っていく。そして出てきた人は、今にも泣きそうになっている。

勝手に『地獄の門』なんて呼んでしまうくらいに、恐ろしいイメージしかない扉なのだ。

「ああ…、あれは”所長室”への入り口さ」

見たくもないのか、ロマンは扉を背にして親指で指し示しながら言い放った。

うげっ。

つい、そんな声が漏れた。

「あそこに呼ばれる理由は、基本的に二つだ。

怒られるようなことをしたときと…」

ゴクリ…。

したときと…？

「…無理難題を押し付けられるときだ！」

ど、どちらも嫌なことだどう!?

何てことだ、それでは呼び出された時点で終わっているじゃないか。救いが無さすぎるのは戴けない。

「故に、あの扉を通るところは誰にも見られたくないんだ。絶対に後で弄られるからね。でも、そんな現場に既に何度か居合わせている岸波くんって、一体何者？」

そんなに不思議なことだろうか？

確かにたった数日間、数回見掛けてはいるが。

「不思議なことなんだよ、岸波くん。さつきも言ったように、誰にも見られたくないことだから、皆周囲に人影がないか確認して、誰もいなくなつた瞬間を見計らつて入るようになっている。岸波くんは少し存在感が薄いけど、変に間の悪い子だなあ」

個性がないとか、そういうのは散々言われてきたことなので気にしないが、存在感が薄いというのは初めて言われた、かもしれない。ちよつと傷付く。

「でもそつかり、カルデア内部の説明はほとんどしてあげてないんだつたね」

ロマンは呑気に話す。

彼の言葉に少し付け加えると、ぎっくりとした説明は受けている。

カルデアは大きく分けて居住区画、研究区画、そして管制区画の3つの区画から成り立っている。研究区画が一番大きく、カルデア全体のおよそ6割を占めていて、次いで

居住区画、管制区画と続く。

3つの区画それぞれの中でもさらに細かく区分けされているらしく、自分が主に使うのは居住区と管制室だけ、とだけは教わった。

「それじゃあ折角だし、今からこのボクが直々にカルデアを案内してあげよう！ どうだ
い、嬉しいだろう？」

えっ、と少し引き吊った顔になってしまう。

念のためフォローしておくが、決してロマンのことが嫌だとかそんなことではない。

今の自分は、このカルデアの中でかなり浮いている、と感じている。元来の岸波白野は、無個性で目立たない人間だ。それが最近ロマンと共に所長に叱られてばかりで、
変に悪目立ちしてしまっているのだ。

そんな状況で、カルデアの案内なんてされているところを見られたら、いよいよ何か
怪しまれるのでは？と、実は密かに危険を察知していた。

……自分の状況を知っているのは、マッシュとロマンの2人だけだ。何も考えずにおい
それと話せるものでもない。なので、これ以上目立つようなことはしたくないのが本音
なのだが……。

色々考えながらロマンへ向き直る——と同時にピシりと、自分は動きを止めた。

「ん、どうしたんだい岸波くん？何だか『蛇に睨まれた蛙』みたいな顔になっているよ？
まるで、所長に何かマズいところを見られたような…」

ああ、そうか。ロマンは今所長室の扉に背を向けている。だから気付かないのだ。自分の後ろに、誰がいるのか。

「——誰が蛇なのかしら……？」

地の底から唸るように響く声色が、耳へ届く。それで何かを察したかのように、ロマンが固まった。

そのままの体勢で恐る恐る振り返ると、そこには所長のオルガマリーが立っていた。心なしか髪の毛が逆立って見えるのは、気のせいだと信じたい。

その表情は満面の笑みを浮かべ、時折頬がひくついている。おまけに、額には青筋まで立っているのが分かる。

うん、分かりやすくキレていらっしやるみたいだ。

そのあとは言うまでもない。

その場に正座させられ、2時間ほどのお説教を受けた。当然道行く人達の視線に晒されながら。

その中には、マシユもいた。途中彼女と目が合ったが、呆れた顔でどこかへ行ってしまった。大切な後輩に、あんな顔をさせてしまったことが余りにも情けなくて、穴があつたら入りたくなかった。

そんなことを思い出したので、今日はロマンにカルデアの案内を頼もうかな、なんて考えていた。

いまさらな感じもするが、明日は何があつてもおかしくない。今のうちに、もう少しカルデアのことを知っておきたいと思ったのだ。

ロマンのことだ、おそらくはいつも通り医務室でくつろいでいることだろう。

いざ医務室へ、通い慣れた道を歩き始めた。

医務室到着。早速、自動ドアをくぐって中へ入る。

——ロマン、いる？

声を掛けたが、人の気配が感じられない。医務室には誰もいないらしい。

ここにいないということは、ロマンは自室で引き籠っているのだろうか。とりあえ

ず、ロマンの部屋へと行ってみることにする。

1度しか行ったことのないロマンの自室。かなり記憶だけを頼りに歩いていたら、見たことのない通路に出てしまった。このまま進んでも迷ってしまうと考え、来た道を引き返すことにした。

てくてく……

……おかしい。先程歩いた通りに戻っているはずなのに、明らかに知らない場所へ迷い混んでいる。既に10分くらいは歩いているが、一向に元の場所へ戻る気配はない。どうやら、迷ってしまったようだ。月で自分のサーヴァントに言われたことを思い出す。

そなたには道を覚えようとする気はないのかとか、君の方向感覚には敵わないなどとか、呆れて言葉も出ないとはこの事だな雑種とか、大丈夫ですご主人様！迷うことにかけては世界一？みたいな？とか。

フォローになってないぞ、巫女狐。

ともかく、自分は相当な方向オンチらしいのだ。これはあくまでも他人からの評価であつて、自分ではそこまで言われる程ではないと思つている。

大体カルデアや迷宮アリーナが複雑すぎるのがいけないのだ。断じて自分を正当化している訳ではない、断じて。

迷子になったときは極力移動せずに、誰かが来るのを待った方がいいと言われている。だが、今日のカルデアで誰かが通るのを期待するのは厳しいのではないか？
進むか、留まるか、この選択を誤れば明日まで誰にも発見されなくてもいいかもしれない。それだけは避けたい、と思う。

かつて、最弱のマスターとして最強のマスターを打ち倒し、月の女王と名乗っていた^BDSの後輩と黒幕である色欲魔人の野望さえも打ち砕いた自分が、こんな間抜けを晒してしまつては彼らに合わせる顔がない。

何よりも、これ以上所長に怒られるのはイヤだ!!

しかし、現実是非情である。

どちらへ進めば良いのかすら検討もつかない自分では、本当にこのまま誰かに発見されるまで、さ迷い続けるのではないだろうか。

「……先輩？こんなところで何をしているんですか？」

そんな情けない自分の前に、^{先輩}救いの女神が舞い降りた。

#04 Days — 束の間の安息 —

「なるほど、道に迷っていた訳ですね」

一言、バツサリと切り捨てられた。

「切り捨てた、なんて物騒な。先輩の話をまとめただけです」

違うよ？全然違うよ？

迷っていたのではなく、そう！探索してた！カルデアという迷宮を、探索していたんだよ！

「……つまり、道に迷っているのではないと。そう言いたいのですね、先輩は」

うむ、その通りである。

「……そうですか。では、その探索とやらを続けて下さい。邪魔してしまつてすみませんでした失礼します」

待つてくたさいすみません嘘です！嘘吐きました！道に迷っているんです助けてください！

「……ふう。最初から素直にそう言えば良いんです」

仰る通りでございます。

「で、どちらへ向かっていたんですか？」

ロマンの部屋。

「ほとんど反対方向じゃないですか……。ここは研究区画の中でも『保管区』という、比較的警備が厳重な区画です。確かに、慣れていなければ迷うこともあります……。どうしてそんなに方向オンチなのに、変な見栄を張ろうとするんですか」

だって方向オンチじゃないし。

まだそんなこと言うんですか、なんてマシユは呆れ顔で言うけれど。

「……それに、マシユにこれ以上格好悪いところを見せたくなかった。

すると彼女は一瞬驚いた顔をして、

「……そんなことぐらいで見捨てる訳ないじゃないですか」

そう言って、小さく微笑んだ。

それを見て、自分に失望はしないと語ってくれた^{××}のことを思い出し[×]——

「……大体そんなことで見捨てるくらいなら、初めから助けたりしません。つて聞いて

るんですか、先輩っ」

マシユの声で我に返った。少しポーツとしていたらしい。

「……懐かしい夢を、垣間見た気がした。

彼女の顔を見ると、頬を膨らませて唇を尖らせていた。

……何それ、可愛い。つい、にやけてしまいそうになるが、何とか堪える。ここでもやけてしまえば、マシユは容赦なくここに自分を置いて立ち去ってしまうだろう。我慢しなければ。

……ごめん、何だっけ？

「もう、何でもないです。それよりも、先輩はどうしたいんですか？」

ちよつと拗ねてる。そこがまた可愛いな、なんて感じさせるのは彼女の魅力に違いない。

しかし、ただロマンの部屋へ案内してもらうのも勿体ないのではないか？ここで会ったのも何かの縁だ、折角なので。

……自分に、カルデアの案内をしてくれないか。メガネの似合う可愛いお嬢さん。

はくの の ほめぐろし！

「かつ可愛……!?ほ、褒めても何も出ませんよ？」

こうかは ばつぐんだ！

実際、自分としては事実を言ったままでのこと。最近はやつくりと話も出来なかったの
で、ちよつどいい機会じゃないか。

「……褒めても何も出ませんが、それくらいならお安いご用です。タイタニック号に

乗ったつもりでいて下さい！」

よく分からないが、それって沈むんじや？とも思ったが、野暮なことなので言うまい。兎にも角にも、ここにマシユとの休日が始まったのだった。

「そういえば、先輩は何故ドクターの部屋へ向かっていたのですか？」

マシユにそう聞かれたので、ロマンにカルデアを案内してもらおうと約束したことや、その後待っていた仕打ちについて話した。

「二人で所長室の前で所長に怒られていた時ですか。所長室の前で呑気に話し込むなんて、先輩もドクターも不用意過ぎます。」

あ、あれはロマンが悪いのであって、自分に非はないんじゃないかな？

「いいえ、先輩もです。むしろ、先輩の方が深刻です。」

そこまで!?

「先輩はこう、見てるこつちがハラハラすると言いますか、危なっかしくて見ていられないと言いますか、ともかく心配なんです！」

そうだったのか……。そこまで強く言われると、否定し辛い。

ん？何かその台詞、以前にも言われたことあるような？

ブロッサム先生……うつ、頭が……!

「それにしても、ドクターとそんな約束を……ということ、私はドクターの代わり……?」

お、自分が思い出ししてはいけないもの思い出しそうになっている間に、今度はマシユが頭を抱えている。

どうしたの? 顔色悪いけど。

「いえ、何でもありません。……自分が只の代わりだと思つと、あんなに喜んでいたのが恥ずかしくて……。」

代わりがどうかか聞こえたが、何の話だろう。ともかく落ち込んでいるようなので、一応のフォローは入れておく。

今日はマシユと一緒にいられて、嬉しいよ。

「! ……その、ありがとう……、ぎいますっ! 精一杯、頑張りますっ!」

うん。とりあえずは元気になってくれたみたいだ。でも、頑張るって何を?

さつきまで落ち込んでいたのに、今は顔を赤らめて張り切っている。最初こそクール系かと思っていたが、あまり顔に出ないだけで感情豊かな子だ。

心を許した相手には、懐いてくれるようだ。自分が特別なのかはまだ分からないが、この関係は守りたいと思う。せめて自分が、どんな存在なのかハッキリするまでは。

「フオーウー！」

マシユと二人で歩いていたところに、突然の奇襲を受けた。

「ひゃつ……!?!」

マシユ!?!大丈夫!?!

白いもふもふしたものが、マシユの頭に飛び掛かっていた。そこから、スルスルツと流れるように彼女の肩へと収まる。

……何だこの生き物は。如何とも形容し難い姿。全身が真っ白な毛で覆われていて、とてもあつたかかそうである。誰かのペットだろうか？

「……もう、ビックリさせないで下さい。フオーウさん」

キュウくん、なんて可愛らしく鳴く謎の生物X。

——フオーウさん？何だかハチミツが好きそうな名前だなあ。

「先輩、それは危な——ちよつとフオーウさん、暴れるのは止めて下さい。」

どうやら、この白いモフモフがその“フオーウさん”らしい。

「先輩は会うのは初めてでしたね。このリスっぽい生物はフオーウさんと言います。いろいろと謎多き存在ですが、このカルデアを自由に散歩する特権生物です。」

……フオーウさん、リスなの？

「ええ。リスに似てるじゃないですか。」

似てると言われればそんな気がするし、似てないと言われればそんな気もする。もしかして、新種なんじゃないか？

リスかどうかはともかく、フオウは随分とマシユに懐かれている。肩に乗せている姿は何だか様になっていた。魔法少女とその使い魔みたいなイメージ。

「フオウさん、こちらは岸波白野先輩です。人畜無害を擬人化したような人で、とてもいい人です。」

マシユが、フオウに自分のことを紹介している。

そんな風に思われていたのか。

よく言われます。

「私の頭に飛び乗り、そこから肩へ降りていくのがフオウさんのマイブームのようです。」

ほう、羨ましい限りだ。

「羨ましい？何がです？」

……いやいや、こちらの話です。

自分もフオウとコミュニケーションを取ってみようと思い、試しに手を差し出してみました。

するとフォウは、ちよんちよんと前足(?)で手をつつき、危険がないと判断したのか、手から腕を伝って自分の肩にもものつてくれた。

毛並みが綺麗で、見た通りモフモフしていて気持ちいい。寒い夜なんかはフォウを抱いて寝たら暖かそうだ。

「驚きです……！フォウさんが私以外の人にこんな懐くなんて。先輩のこと、気に入ったみたいです。」

そうなの？

だとしたら、光栄だ。

「フォッフオフォーウ、フォ、フォーウ♪」

今度は自分、マシユ、フォウの3人で歩く。

マシユはフォウのことについて、いろいろ話してくれた。

「最初、勝手にカルデアに住み着いたフォウさんは、目撃者の少なさから軽い心霊現象にされていました。その存在が確認された時は、何とかして捕まえようとする動きもあつたみたいですけど……フォウさん、すばしっこいので全然捕まらなくて。」

そのうち皆さんが慣れてきて、放置するようになったんです。」
要は根負けしたのか。恐るべしフォウ。

私のカルデアに何勝手に住み着いてるのよー！なんて、所長が騒ぎそうなものだが。「理由は分かりませんが、所長はフォウさんのことが苦手みたいです。」

おそらく所長がフォウさんを捕まえようとした際に、フォウさんが何かしたんだろうとは思いますが。それ以来、所長はフォウさんが近付くだけで怖がるようになってしまいました。

そのことをフォウさんに聞いても、誤魔化してどこかへ行ってしまうんです。」

確かにフォウには不思議な愛嬌がある。それと同時に、何故だかこちらの言葉を理解しているようなーん？

”そのことをフォウさんに聞いても”ってことは……。

えっ、マシユはフォウと会話も出来るの!?

「会話、と言えるかは微妙なラインですけど。何となく伝えたいことは分かります。」

カルデアで、私が一番フォウさんという時間が長いですから。自然とお世話するのも私になっていきますし。」

「フォウフォウ、キューン！」

自分の肩に乗っているフォウが、弾む声で鳴いた。

「ほら、フォウさんもこう言ってます。」

いや分からないよ!?

どうやらマシユは、少し天然なのかもしれない。

マシユの案内は実に分かりやすく、要点を押しえていた。

但し、自分が道を覚えられるのと、案内が的確なのは何の関係もないようだった。また迷子になる気配が濃厚過ぎて、誰かにカルデアの地図を作って欲しくなった。

「増築と改築を繰り返してきましたので、複雑な構造になってしまっているのは確かです。」

ですが、それを考慮してももう少し先輩には、覚えようとする努力が必要かと。」

「フオウフオウ、アフオウ」

あれ？何か、マシユが冷たい？

何だかフオウにも若干バカにされた気がするのは何故だろう。

「冷たくありません。一人ではまた迷子になってしまいう可能性が高いのは、紛れもなく事実ですから。」

……
こ、言葉が痛い……。彼女にここまで言わせてしまふ、自分の不甲斐なさが恨めしい

「……です。次からは一人ではなく私かドクターを呼んで下さい。」

つ。

不意打ちとは卑怯なり、そんな顔で言われてしまつては、こちらも——

——自分のために、毎日味噌汁を作つてくれないか？

——つい、ブツ飛んだことを口走つてしまつたではないか。

言つたそばから、自分の顔が真っ赤になつているのが分かるくらい、熱を帯びてくる。不可抗力だ、こんなもの。

今すぐに走つて何処かへ逃げたいが、そんなことをすればまた迷子になり要らぬ心配をかけてしまうので、脚が動かないよう我慢するしかない。

マシユはどんな顔をしているだろうか。変なことを言つた自分を、どんな目で見ているだろうか。先程の言葉に対して、何も言つてはくれない。

チラツと彼女の盗み見ると——

——キョトンとしていた。

まるで、何を言っているのか分からないという感じで。

へ？

ま、まさか……あのく、キリエライトさん？

「……………どうしてそこで、そんな他人行儀な呼び方なんですか。

いえ、あの、先輩のお言葉の意味を考えていたのですが、中々思い出せなくて……………」

「いや知っているんですよ？喉の辺りまで、こう、出かかってはいるのですが。

うーん、ニホンの勉強をしたときに、確か……………。単純に、毎日お味噌汁を作るのではなく、何かの暗喩だった気が……………」

……………
「ああ〜先輩！何もそんな真顔にならなくても〜！」

……………

これが、自分のサーヴァントに言われた『鈍い』ってことなのか。ちよつと違う気もするが。

思ったよりも、衝撃があつた。自分だけ舞い上がっていたかのような気恥ずかしさ。こんなものを、自分は味合わせていたのかと猛省する。

もつと気を配らないといけないな、と思う。

顔の熱が、一気に引いていく感覚がある。

あつという間に立場が逆転した。

今度はマシユが慌てていて、自分は驚くほど冷静だ。

一生懸命自分の言った言葉の意味を思い出そうとしているのだろう。挙動がどんどん怪しくなってきた。

そろそろ、冗談だったとこの話を切り上げなければ。後でからかわれるに違いない、何て考えていると。

突然、マシユが頭をわしやわしやと乱し始めた！

驚いて、声も出ない。そこまで考え詰めていたのか……。

今度はピタリと止まったかと思えば、落ち着いたのか全く動かなくなってしまうマシユ。

数秒前まで綺麗に整っていた髪は、見るも無惨な状態になってしまっていた。

……マシユさん？

恐る恐る声をかける。自分が負荷を掛けすぎて、ついに壊れてしまったのか？

「……思い出しました。」

えっ何を？

「やっど、思い出せました！先輩の言葉の意味が！」

あ、ああ。あれは実は冗談で……。

「あれは確か、日本人の男性が女性を口説くときの常套句で、その意味は……」

そこまで言って、またまたマシユは固まってしまった。

「……その、意味は。」

”自分と結婚して、毎朝味噌汁を作って欲しい”……。

次の瞬間、マシユの顔が茹でダコのようになり、ボンツ！という、およそ人体から発
生してはいけない音と共に……気絶した。

#05 Limits — 決戦前夜 —

「……頭が沸騰しているかのような、そんな感覚です。」

倒れてしまつてから、すぐにマシユは気が付いた。自分の安易な発言のせいで、彼女に負担を掛けてしまった。反省しなければならぬ。

「いきなり、あんなことを言われる身にもなつて下さい。……本当にビックリしたんですからね。」

それは本当に申し訳ないと思つてる。どこか辛いところはない？

「……はい。大分良くなつてきました。もう歩けると思っています。」
良かった。

——改めて、マシユを見る。

うつすらとピンクがかつた髪に、透き通るような白い肌。触れれば壊れてしまいそうな儚さと、女性らしい柔らかさを併せ持っている。

その在り方に、何度も”桜”を重ねている自分がある。

——間桐桜。月の聖杯戦争において、マスターの健康管理を目的として作られた上級A I。

共に月の裏側に落とされ、生徒会の一員として自分をサポートしてくれた後輩。彼女が居なければ、自分達は何も出来ないまま虚数に飲み込まれていた。

どことなくマシユと桜は似ている。容姿ではなく、雰囲気だ。

だからだろうか、守りたいと思ってしまう。桜に抱いた感情と同じものを、自分はマシユに対して抱いている。どうしようもなく、保護欲を掻き立てられる。

マシユが岸波白野のことを『先輩』と呼ぶように、自分もマシユのことを『後輩』として——守るべき存在として認識しているのかもしれない。

そんなことを考えていたら、無意識のうちにマシユの乱れた髪を整えていた。まるで、父親が子供をあやすような手つきで。

「……その、先輩。もう大丈夫ですので、そろそろ離して頂けると助かります。恥ずかしさでまた頭が沸騰してしまいそうです。」

髪がすっかり元通りに整ったところで、マシユがそう言った。

現在の体勢を一言で言うなら、「お姫様抱っこ」に近い。

正確に表現すれば、マシユは床に寝ていて、自分は片膝を付き彼女の腰と頭を手で支えている。彼女を床に寝かせるのも忍びなかったので、こんな体勢になってしまった。

——本当に、大丈夫？

マシユの抗議も尤もなのだが、また倒れられでもしたら困る。心なしか、顔もまだ赤

い気がする。

「先輩がヘンなことするからですっ！まったく……。」

先輩は誰にでもこ、こういうこと、するんですか……？」

まさか。そこまでお人好しではない。

大体そんなことしてたら後が怖い。

余に優しいものが好きなのだ！と胸を張る薔薇ワガママの皇帝は、すぐ拗ねる上になかなか許

してくれない。

良妻系巫女メンヘラ狐狐に至っては、御主人様を惑わす奴は許さねー！なんて騒ぎながら呪い殺

すかもしれない。

これを冗談ではなく地で行くから本当に怖い。

……なんだろう、よく生きてたな自分。

「……多分先輩は、私の言った意味を勘違いしていると思いますが。

そうですか。そう、ですか……。」

フフツと、マシユが微笑む。

……どうやら本当に大丈夫のようで、心から安堵する。

「フオーウ？」

フオーウも心配していたようだ。マシユにすり寄って、不安そうな声で鳴いている。

マシユが立ち上がろうとしたので、手を貸す。

「んっ……と。ありがとうございます、先輩。」

これくらいお安いご用だ。

「フオウさんも、先輩も、ご心配をお掛けしました。

マシユ・キリエライト、復活です！」

グツと胸の前で小さくガッツポーズする。

……そうだ、マシユは“桜”じゃない。

マシユはマシユ、桜は桜だ。今自分の前にいるこの後輩の、ありのままを見ていこう。

「私はもう大丈夫ですの！」

さあ、行きましょう！まだ案内する場所は、たくさんあるんですから！」

そう言いながら自分の手を引っ張るマシユ。

元気なことは良いことだと実感しつつ、そのまま引っ張られていった。

——訂正しよう、元気すぎるのも考えものだ。

時刻は午後7時過ぎ。カルデア正面ゲート前。

流石に陽が落ちて時間が経っていることもあり吐く息は白く、地面には雪が積もって

いる。周囲には背の高い外壁と、強固な“門”がそびえ立っている。

カルデアがどこその山中にある、くらいは教わっていたが、自分の目で見て改めて実感した。

あの後、マシユに連れられてカルデアのほとんどを案内された。あまりにも多くの場所へ行つたため、歩き疲れた挙げ句マシユの説明すら覚えていない自信がない。

気分を変えたくなつたのでどこか無いかと訊いたところ、外へと連れてきてくれた。

ここには、自分とマシユしかいない。フオウは自分達が外へ出ると把握したら、あっさりとどこかへ行つてしまった。寒いのが苦手なのかな。

「随分と連れ回してしまいましたね。」

……すみません、少しはしやぎ過ぎました。」

いや、そんなことはない。今日は本当に楽しかった。こんなに充実したのは、カルデアへ来て初めてだった。

それに、カルデアから出ることが出来たのは嬉しい誤算だ。

「正確には、ここはまだカルデアの敷地内なんですけどね。」

マシユからツツコミが入るが、それ自体はさほど重要ではない。ようは『外の空気を吸う』ことが必要だった。正直、結構参っていた。あのままカルデアに閉じ籠っていたら、ノイローゼになっていたかもしれない。

” そんな訳無いでしょ。岸波くんの精神はそんなに脆かったかしら?”

……なんか今、頭の中に遠坂凜守銭奴の声が聴こえたんだが!?

弱音を吐いていたからだろうか、きつと彼女ならこう言うんだろうな、なんて考えてしまったのか。

いや、自分にはそんな鉄の意思とか鋼の強さとかないからね? 現にこうして幻聴まで聴こえているしね?

自ら望んだ訳ではない場所で生きていくというのは、思っているよりも精神的に来るものがある。それは実際に経験した者にしか分からない。

ムーンセルにいた時も似た状況ではあった。しかし全く同じ状況ではない。

ムーンセルでは、6日間の猶予期間モラトリアムにて2つの暗号鍵トリガーコード——決戦場への扉を開く為

の鍵を入手し、7日目に決戦場で対戦相手と文字通り命を懸けて戦う。暗号鍵トリガーコードを手に入れることが出来なければ、決戦場へ赴く——すなわち戦うことすら叶わずに死を与えられる。

暗号鍵トリガーコードを手に入れる。

ひいては、自分の命を守ることが必要になる。

また、英霊サヴァントというパートナーの存在。彼らは参加者達の剣となり盾となるだけでは

ない。常に傍にいて自分を守護してくれる安心感だけでなく、同じ時間を共有することで良好な関係を気付くことも可能だ。その絆が、心の支えとなる場合がある。かつての自分がそうであつたように。

『具体的な目標』と、自分を支える『何か』。

今までの自分には足りなかつた。

そして、今の自分は見つけることが出来た。

人理存続なんて言われても、いまいちピンと来ない。そんな高尚な願いなど、知つたことではない。

自分がこの時代で見つけた願い。

小さく粗削りな、願いといえるかさえ分らない、そんなもの。

——マシユを守りたい。

願いには大小こそあれど、優劣はない。その勝敗は願いの質ではなく、強さによつてのみ決まる。どんなに立派でも、ちつぽけな願いに負けることもあるということだ。

そつと、彼女を見る。彼女もまた、自らの使命を成し遂げようとしているのだろう。その華奢な身体に、重いものを背負っているのかもしれない。

そんな彼女のことを、尊いと感じる。

——自分はいつだつてそうだった。人間の暖かさを、優しさを、尊び守ろうとして

きた。今回も同じことだ。

マシユのことを守りたいと思った。だから守る。

その為ならば、人類だろうが何だろうが救おうではないか。……何だかどこぞの金ぴかみたいだな。”ようやく分かってきたようだな、白野よ。”なんて言われそうだ。

ともかく誰に何を言われても、これだけは諦めることは出来ないと思う。自分はそういう人間なのだから。

「どうかされましたか、先輩？」

自分がこちらを見ていることに気付いて、マシユが問いかけてくる。

マシユには、本当にたくさんものを貰った。

これまでに出会い、時に戦い、時に手を取り合った人達から、自分はたくさんものを貰い、たくさんのもを受け継いできた。それらが魂の一部となり、『岸波白野』という人間を作り、支えてくれている。彼らに出会わなければ、自分はここに立つてはいなかっただろう。

貰った分だけ返さなければいけないものができたが、どれだけ返せたのかは分からない。

思い出したのだ。自分は多くの人に支えられて、今日まで生きていたことに。

その中に、既にマシユは入っている。

マシユだけではない。ロマンやカルデアで出会った人々、所長だってそうだ。故に、今まで貰った『何か』と支えてくれた恩を、彼らに返さねばなるまい。

——ありがとう。自分が生きる意味を見つけられたのは、マシユのお陰だ。しつかりと彼女の目を見て、言った。

「先輩は本当に裏表がないというか、素直な方ですね。……私は、先輩にお礼を言われるようなことを、まだ出来ていないと思います。ですが先輩の直球な感謝には、私も直球で返すしかありませんね。」

マシユはこちらへ向き直り、自分と同じように真正面を見据えて言う。

「——どういたしまして、です！」

照れているのか、はにかむ笑顔が印象的だ。

そんな顔も出来るのかと感心しつつ、やっぱり自分の願いを曲げたくないと思った。

ふと上を見上げると、綺麗な星空が浮かんでいた。

「この辺りは標高がそれなりに高く空気も澄んでいるので、夜は星がよく見えるんです。」

本当に、どうして今まで気付かなかったのかが不思議なくらい綺麗だ。

暗黒の空に、煌めく無数の星。

その光景は、偽りの予選が崩れ去り校舎とそこにいた人間が次々と虚数に飲み込まれていく中、屋上から飛び降りたロープあの空間に似ている。

もちろん、あの時のような不快感など微塵もなく、ただただ圧倒されている。これが自然の偉大さ、なのだろうか。

「先輩は一々表現が大袈裟です。圧倒される、というのは同感ですが。」

大袈裟……大袈裟って。そこまで言われることはないと抗議の目を向けて見るが、マシユは素知らぬ顔で夜空を眺めている。

自分はこれまで、データの集合体でしかない”自然”しか知らない。

月想海と呼ばれる迷宮^{アリーナ}は、名前の通り”海”をモチーフにしている。広大なデータの海という言葉がぴったりなそれは、結局はどこか電子的な装いがあった。

そんな自分が初めて本物の自然を体感したのだ。少しくらい大袈裟でもいいと思う。

しかしマシユはそんな言い訳には一切関心を示してくれないので、少しばかりふて腐

れながらも一度この満天の星空を見上げる。

綺麗だ、以外の言葉が出てこない。自分の貧困なボキヤブラリーもあるが、圧倒されて言葉を忘れてしまっているというのが大きい。

そんな素晴らしい夜の帳に、

——一筋の、瞬く彗星の尾がなびく。

それを見た瞬間に、強い既視感デジャヴを感じた。

あれは——そうだ。

虚数の中で身動きひとつ取れず、目も開けられず、声さえあげること出来ずに無限に落ちていく自分の前に、己の危険すら顧みずその身を燃やしながらも来てくれた、

忘れてしまっていた

／忘却の彼方にいても忘れることの出来なかった

その名を呼べばいつだって応えてくれた、岸波白野のサーヴァント。

光届かぬ暗闇を切り裂くその軌跡は、まさしく流星のごとき輝きを放つていた——。

「あ、流れ星ですよ！先輩、今の……先輩？」

マシユの声で、現実へ引き戻される。

「……また、懐かしい夢を見ていたようだ。」

「先輩は時々どこか遠くの、ここではない場所を見ているようなことがありますね。」

曖昧で、しかし自分の胸に刻まれた遠い記憶を、思い出していた。

岸波白野白が生まれた、原点とも呼べる場所の話だ。

「どんなところなんですか？私、先輩がいた場所に興味がありません。」

「……また今度、ゆっくり話そう。」

そう、答えた。

「分かりました。約束、ですからね？」

うん、約束。

「そういえば、流れ星にお願いはしたの？」

「いえ、それが……。初めて流れ星というものを見たので、感動と興奮で何もお願い出来ませんでした。流れ星が流れる間に3回お願い事をすると、願いが叶うんですよ？」

ガツクリと肩を落とすマシユ。

感動と興奮って……。自分だって大袈裟じゃないか、なんて言うのと拗ねてしまうので間一髪で言葉を飲み込む。

今からでも間に合うんじゃないかな、お願い事。

「本当ですか!?! そんなルールがあつたなんて……具体的には何秒までなら、とか条件があるんでしょうか!?!」

あ、うん、ないんじゃないかな……?!

詰め寄られてしまい、咄嗟にそんなことを口にしてしまう。

気休めで言ったただけなのに、いきなりルール化されてしまった。……まあ、マシユが喜んでくれるならいいか。

「ええと、ええつと……どうしましょう先輩! 何も思い付きません!」

流石にそこまではフオローしきれない。……ので、そんなさがるような目で見ないで欲しい。

うえつ?! 上目遣いで、その上涙目だとう!?

——今思っていることを、素直に言えばいいと思うよ。

「はいっ! ありがとうございます! ごさいます、先輩!」

……。

……何だろう、自分は駄目な先輩だと分かった。

涙目で、上目遣いで、可愛い後輩をお願いされる。その破壊力たるや、光の御子のルーンを乗せた刺し穿つ死棘の槍、または呂布奉先の軍神五兵——つまり、校舎側からア

リーナまで貫通するほどの宝具と同等の威力と言える。

この破壊力に落ちない先輩男は、恐らくいないだろう。

これを狙ってではなく素でやるあたり、マシユの将来が不安になる。変な男が寄ってきたら自分が追い払おう、どんな手段を使っても。

一人で勝手に息巻いている間に、マシユのお願い事は決まったようだ。手を合わせながら目を瞑り、真剣にお願い事をしている。

「……先輩のお話を、いつか聞けますように……」

お願いに集中しすぎて、声が漏れてしまっていた。

やがてお願いは終わったのか、首だけこちらに向けて

「……聞こえましたか？」

なんて小声で聞いてきた。

大丈夫、聞こえてない。

「そうですか……。折角のお願い事なので、内緒に出来て良かったです。」

可愛い後輩の為だ、嘘の1つや2つなら重ねたって構わないだろう。

楽しい時間はあっという間に過ぎていく。

外へ出てから、既に30分近く経過していた。コートなどの防寒具もなくそれだけの時間冷たい外気にさらされていたので、体温の低下は免れない。

最早寒さではなく痛みを感じ始めてしまい、急いで建物の中へ入ることに異論を挟む者はいなかった。

「この格好で外に出るのは、無謀だと最初に気付くべきでしたね……。」

お互い寒さに震えながらロビーで足元の雪を払う。

まだ正面ゲートからたった数歩しか入っていないのに、二人とも汗ばみ、雪は溶け出し床に小さな水溜まりを作っていた。この異様な熱気は、寒暖の差が激しいせいで暑く感じるだけだ。少しすれば、この温度にも慣れて汗も引くだろう。

行き過ぎた暑さではないが、入り口でこれだけ快適な温度を保っているというのは普通ではない。

もしかしたら、建物内の温度や湿度を調節出来るような魔術があるのかもしれない。5分もしないうちに、汗は引いてきた。

「大分体が暖まりましたね。……そろそろ部屋へ戻りましょうか。」

そうか。少し早い気がするのは、自分がマッシュという時間を楽しいと感じているからか。

「明日は大事な作戦です。睡眠をしつかりと取り、体調を万全にしておくことが必要です。」

マシユの言葉は正しく、そして自分の役割を理解している者の言葉でもある。

そうすべきという”提案”ではなく、そうしなければならぬという”義務”なのだ、と彼女は告げているのだ。

それに、自分は納得した。

今日はもう、休もう。何のための休日であるのかを、履き違えてはいけない。

ただし、1つだけ問題がある。

「問題……とは何ですか、先輩？」

見当が付かないらしく、マシユの頭の上に？が出ているのが分かる。

何、そんなに難しいことじゃない。何故、今日マシユにカルデアを案内して貰ったのかを考えれば、自ずと答えは出るはずだ。

「何故先輩にカルデアを案内したか、ですか……。」

……まさかとは思いますが、先輩……自室が分からないんですか？」

マシユ、正解。10ポイント獲得。

「何てことでしょう、私の今日一日の労力は全て無駄だったんですね！」

すまない、情けない先輩ですまない……。

「そんな、別に怒ってないですから顔を上げて下さい。

ちゃんと先輩の部屋まで送っていきますから。」

本当？ やったー！

やっぱり、持つべきものは可愛い後輩だね！

「……若干誘導された感があるのは、気のせいですかね？」

き、気のせいだよ、きつと。

こうして、マシユとの休日はロスタイムへと突入したのであった。

ーーー自室へ到着して、しまった。

実は入り口から近いところに、自分の部屋は位置していた。おかげで道も覚えることが出来たが、同時にロスタイムも終わり試合終了のホイッスルが鳴り響いた。自分の胸の中だけに。

ロスタイムは2分もなかった。こんなものでは、どうしようもない。

諦めて自室で休むことにした。これ以上は、何よりマシユに迷惑をかけることになるからだ。

ーーーおやすみ、マシユ。また明日。

「はい先輩、おやすみなさい。……また、明日。」

また明日というのは、魔法の言葉だと思う。その日がどんなに名残惜しくても、また明日があると気付かせてくれる。

別れの挨拶を交わすと、マシユはくると回る。

「そういえば先輩。」

ん、マシユの方から自分を呼び止めた。

そのまま、自分に背を向けた状態で話を進める。

「先輩は、流れ星に何かお願いしたんですか？」

あ、その話か。

自分は——

——秘密ないしよだ。

危うく口を滑らせてしまうところだった。セーフ、セーフ。

マシユは小さくそうですか、と呟いた後、突然180度回り——

「……じゃあ、いつか私が何をお願いしたのか話すときには、教えて下さいね？」

「……ああ、約束だ。」

最後にそれだけ言つて、軽くスキップなんてしながら自室へ戻つていった。

その背中を見送つた後、自分はベッドに倒れ込む。

今日は本当に楽しかった。

たった1日だけだったが、こんなに心が休まることなどなかった。

月にいた頃は、不安で押し潰されそうになる毎日だった。自分の記憶、敗者の末路などから何度逃げ出したくなつたことか。今だつて、それは変わらない。

安易な逃避に走らなかつたのは、サーヴァントのおかげだ。

薔薇の皇帝は、自分を引っ張つていつてくれた。

正義の味方は、刺々しいが自分の成長を諦めなかつた。

傾国の妖女は、常に自分を盛り立て支えてくれた。

黄金の英雄は、自分の在り方を裁定してくれた。

各々が各々のやり方で自分の選択に寄り添つてくれたから、今の自分が在る。

今朝までは、自分の記憶を辿ることが怖くて仕方がなかつたのに、今は記憶を掘り起

こす度に自分の気持ちを確かめることが出来た。

明日からのことは、まだ分からないことだらけだ。

……それでも進むしかない。

それしか出来ないのだから、

それを選んで来たのだから、

ならば、これからも貫いていこう。

ふと、明日よりもさらに先のことを考えた。

気が早い、なんて言われそうだけれど。考えずにはいられなかった。

どうなるかなんて分からない。

分からないのはいつものことだ、と笑い飛ばせる。

ならば自分は、自分の思い描く未来に向けて前だけを見て歩くだけだ。

願わくば、皆が笑える幸福な終幕を。

今なら分かる気がする。”人生の全てを喜劇にしなければ成り立たない悲劇”で、主役を務め続けた剣の英霊がかって自分に語ったこと。

『色々あったが、神が出てきて解決した』。

今の自分は機械仕掛けの神にすぎるほどではないが、そんな結末でもいいと思ってい

る。

——作戦開始まで、残り13時間12分51秒。
備え付けのデジタル時計が、運命の時を刻む。

明日に備えて早めに寝ようと思ったのだが、なかなか寝付けない。

原因は、多分マシユだ。

あんな顔をされては、しばらくは頭から離れないだろう。

最後にした約束は、叶う日が来ることを願うばかりだ。

#06 Sucks The Beginning |

一段目で躓く覇者 |

燃え盛る炎と、紅く切り取られた空。

地獄から、生まれた。

忘れてはいけない／目を逸らすな

それこそが、人間の罪だと、その声は謳^{うた}う。

そう、これは罪だ。

忘却とは、赦し難い罪である。

人間とは愚かしい生き物だ。

罪を犯し、

その罪には、結果がない。

罰を受け、

その罰には、意味がない。

そして、忘却に溺れる。

——その忘却には、未来が存在しない。

——故に、忘れてはいけない。

——その地獄から、生まれた意味を。

——欠けた夢を、見ていた気がした。

壁に掛けられた、備え付けのデジタル時計に目を向ける。

——作戦開始まで、残り7時間38分16秒。

——運命は、確実に時を刻んでいる。

……寝汗がひどい。シャツが体に張り付いて気持ちが悪
い。息が荒く、呼吸も乱れて

どうやら、怖い夢でも見ていたらしい。

このままでは風邪を引いてしまうかもしれないので、シャワーを浴びることにした。カルデアには、居住区の個室にそれぞれシャワールームがある。そこまで広くないものの、一人で使う分には特に問題もない。シャンプーやボディースープなども、完備されている。

やたらとハイテクなのが特徴で、浴室の壁にはタッチパネル式の小さな液晶が埋め込まれており、照明や水温、果ては室温まで調節することが出来る。

本場に魔術師が住んでいる場所なのか、ここは。自分の記憶では、魔術師とは神秘の秘匿を重要視するので、その神秘を只の自然現象だと暴いてしまう科学のことを、敵視しているのではなかったか。

このシャワールームには浴槽——お風呂というものがない。それを置くだけのスペースを確保できなかったのか、或いは予算の都合上かは知る由もないことだが。浴槽に湯を張るのは、実際思っている以上に無駄が多いものだ。

まず第一に、浴槽に張る水の量。

次に、それを沸かす為のガス。

最後に、使い終わった湯の処理。

おまけに、それらをカルデア職員全員分。

ほとんど外界から遮断されているカルデアで、大量の水を無駄使い出来るとは思えない。というか、無駄使いさせたくない。儉約家である自分は、国を傾けてしまうほどの皇帝やどこからか財宝が湧いてくる黄金律の塊よりも、主夫の英靈眞性のようなタイプなのだ。

「せめて執事バトラーと言ってくれ、主夫ではないぞ私は。」

遙か遠い月から、双剣を携える弓兵の苦言が聞こえる。

やつてることが母親おかんそのままなのに。

個人的には、『大浴場の設置』が理想である。俗に銭湯と呼ばれるような、大多数で同時に入ることの出来る形式ならば、お湯などを最低限で済ませることが可能となる。

あ、もちろん男女は別。……何だか言い訳っぽく聞こえるが、これだけは言っておかなければいけない気がした。

「ご主人様のおく、お背中お流ししちやいますっ☆」なんて世迷い言を吐きながら突貫してきそうな自称良妻ホに心当たりがある。

自分がお風呂に対して多少こだわっているのは、彼女の影セイバ響が大きい。

彼女は無類のお風呂好きで、聖杯戦争本選の直中ただなかであつても隙あらば湯浴みを嗜んでいた。

『薔薇の皇帝』と呼ばれるだけあつて、薔薇風呂に浸っている彼女は美しい。

その美しさに見惚れていると、いたずらっぽい笑顔を浮かべて

「奏者よ、一緒に入るか……?」

なんて言つて、自分のことをよくからかっていた。

最初は戸惑うばかりだった自分だが、慣れてくると『入っていいの? やったー!』と、逆にセイバーをからかったこともあった。

なつ!? 奏者よ、今のはジョークだローマ式ジョークなのだぞ? そもそも奏者と共に入るにはそれなりの準備が必要でな!? なんて、焦りまくっていた。

その後壮絶に拗ねられて、丸一日口を聞いてくれなかった時は反省した。

シャワーで汗を流しつつ、さつきまで見ていた夢を思い出そうとする。今まで度々おかしな夢を見たことはある——S E R A P H——そもそも靈子虚構世界で見るのは夢ではなく、正確には自分の記憶だ——が、今日のそれは何か違った。

本当に些細な、気を付けていなければ見過ごしてしまうほどの、違和感がある。気休めでも気のせいだと言つて自分を安心させたくなるが、その言葉は喉の一步手前で詰まったままだ。

拭い去れない不安とともに、嫌な汗がその額に滲んだ。何の為にシャワーを浴びているのか分からなくなる。

少し頭を冷やすために、タッチパネルでシャワーの温度を調節するスクロールバーを、勢い任せに下へ弾く。フリックする。

すぐに冷たい水が自分の体を流れ始め

——何も考えずに温度を下げたことを、後悔した。

——冷たっ!?

心臓から氷水が全身へ送られていくような感覚。既に寒さで歯が合わなくなっている。

ヤバい。これは本気でヤバいやつだ!

壁に埋め込まれた端末からは、ピーツピーツ、と何かの警告音がシャワールームに響いていた。慌てて液晶画面ディスプレイを確認する。

表示されていたのは、9℃という意味不明な数字と、『生命活動に著しく支障を来します』的な意味の文字列メッセージだった。

それが目に映った瞬間には、勝手に手が動いていた。

水温を40℃、室温も38℃まで上げて、耐える。

当然、温度が設定値まで上がるまでにはタイムラグがある。

だから、耐える。ひたすら、耐える。

実時間にして、約1秒。その永遠かと思われた時間を、耐え切った。

まだ、全身が灼けるようにヒリヒリする。

シャワーを終え、髪の毛を乾かす。髪を撫でるドライヤーの暖かい風が心地良い。

あれだけのことがあったのに、10分くらいしかシャワールームに入っていない事に、少し驚く。

—— 作戦開始まで、残り7時間14分22秒。

午前1時前。

まだ時間がありすぎるので、もう一度寝ようか迷う。

作戦開始時刻の午前8時に第1陣、すなわちマシユのいるAチームのレイシフトが行われる。その2時間前には、コフィンなどの機材の最終チェックを完了させ、1時間後の午前7時に所長からの説明が入る。

それが、今日の予定だ。

技師の人達は朝早くから機材の調整をやらなければならない。

所長を含む管理職は、それらの作業が何事もなく終わるように監督するのと、その前

に今日の作戦の打ち合わせがあるので、技師よりも朝が早い。

もしかしたら、もう起きている人がいるかもしれない。

かく言う自分達、レイシフトを行う魔術師も、寝起きで所長の話を聞きたい者はいないだろう。皆普段よりも早めに起きるのは間違いない。

つまり何が言いたいかというと、今から寝たら所長のお話を寝起きで聞かなければならないのではないか？

もつと言うなら、最悪の場合寝坊してしまうのでは？

寝坊して怒られる程度なら、まだいい。

呆れられて、作戦から外されるのはまずい。

選別された48人の魔術師は、実際にレイシフトする実働隊と、その支援サポートなどを行うそれ以外、いわば補欠の二つに分けられている。

当たり前だが、自分は補欠に当たる。

実働隊に入れなかったメンバーの仕事は多岐にわたり、最も重要なのが”カルデアの防衛”だ。

実働隊、つまりは優秀な魔術師がレイシフトした後のカルデアには、外部からの『横槍』を防ぐ戦力が無い。実働隊が戻ってくるまでの間、何とかその状態のカルデアを守

り抜かなければならないのだ。

しかし、実働隊に欠員が出た際には、補欠要員の中からアサインすることになっていいる。

自分が選ばれる可能性は限りなくゼロに近いだろうが、ゼロではない。であるならば、その可能性にかけるのが岸波白野という人間だ。

だからこそ、作戦に参加できないという事態は避けなければいけないのだ。

寝るか寝るまいか、悩んでいる時間が惜しい。なので、自分の欲求に従うことにした。

——寝よう。

時計のアラームを6時半にセットし、ベッドに入ろうとすると

ブチツと、足元から不吉な音がした。

どうやら、右足の靴紐が切れたらしい。

よりによって、これから睡眠を貪ろうとしていたこんな時に、何の前触れもなく切れたのだろう。タイミングが悪いにも程がある。

幸いなことに替えがあるのです、今のうちに交換してしまおう。

予備の靴紐をクローゼットから取り出して、ベッドに腰掛けて右の靴を脱ぎ、切れてしまった紐を抜こうとする。

嫌な予感がする。

靴紐を交換しながら、そんなことを思った。

人理継続保障機関『カルデア』の所長である私、オルガマリー・アニメスフィアは困惑していた。

その日は、朝から頭が痛かった。

人類の未来を取り戻すため『レイシフト霊子転移』により時間遡行し、2004年——日本の地方都市、冬木に観測された特異点の調査を行う、というカルデアの威信をかけた大事な作戦の為に、私は多くの苦労を重ねてきた。

魔術協え会からの圧力、部下したからの苦情など、挙げ始めたらキリがない。

私の安息は、レフ・ライノール、彼の存在しかなかった。

レフは私の話を聞いてくれる。

レフは私のことを理解してくれる。

レフは私のことを——認めてくれる。

そんな私の苦悩の日々も、ようやく終わる。

今日はレイシフト実行の、作戦当日。今日この日さえ終わってしまえば、私は全ての苦痛から解放されると言っても過言ではない。

思えば今日も、朝から頭痛が酷かった。

カルデアの責任者である私は、作戦の最終調整にも立ち会わなければならぬ。ちよつとしたことでもいちいち報告してくる無能な部下。そんなことも自分で判断できないのか、と文句の一つでも言いたくなるが、そいつに言っても仕方がないので言葉を飲み込む。

その作業の中で、何人かが倒れたらしい。そんなの、適当に医務室にでも寝かせておけばいいわ、何て投げやりに指示を飛ばす。医務室にいてであろうあの男ならば、あの程度の人数は問題なく対処できるだろう。

あの男、ロマニア・アーキマンの能力は、カルデアの職員のほとんどが認めるところだ。もちろん私も、その能力だけは、認めるのも吝か^{やぶせ}ではない。

……本人には口が裂けても言わないけど。

私は、ロマニが嫌いだ。

能力もある。人望もまあ、ある。基本的には優秀な人材に対して寛容な私が、彼を嫌う理由は“人間性”にある、と思う。

彼は仕事が出来る人間だ。それなのに、仕事をすぐにサボる。出来ないのではなく、やらないことを選択する。それが気に食わない。

それに、私生活のだらしないさも嫌いな理由だ。私にはおよそ理解できない趣味を持っていて、時々PCのディスプレイを見ながらニヤニヤしているのがたまらなく気持ち悪い。

何より、多くの人から認められているのが、一番気に入らない。

いつも浮かべている緩み切った顔をを思い出すだけで、つい舌打ちしてしまった。

そのせいか近くを通っていた若い女性研究員が、引き吊った顔をして小走りで逃げるように離れていくのが見えた。

……多分私が怒っていると勘違いしたんだわ。上司の顔色なんて何う前にやる事が有るでしょう、と私はまた一層頭痛が酷くなる。

なおこの後カルデア全体に『所長の虫の居所が悪い』と伝わっていくのだが、そんなことは彼女の知るところではない。

全ての機材の調整が終わったのは、予定時間を30分ほどオーバーした頃だった。

何故こんなにも時間を超過してしまったのか、大きな理由はあの『白いふわふわした

怪物”の乱入だろう。

「フオーウ、キヤーウー！」

突然の鳴き声と共に管制室へ突入してきたあれに、私は怯え——てないけど距離をとった。

あれのせいで、作業員の集中力は削がれてしまったに違いない。それにしても、皆そんなに気にしてなかった気がするのは気のせいかしら？

詳細は割愛するけど、あれの後ろからマシユが続いて管制室へ来た。朝の散歩か何かで逃げられたのかもしれない。

それなら首輪リードでも付けておきなさいよ！

……こほん。

流石はいつもあれの相手をしているだけはあるわね。ものの数分で、見事に捕まえていた。

本来なら、逃がした上に管制室に入られてしまったのは、彼女の失態よ。

でも整備班も、私が思い付くだけで少なくとも二桁はミスをしてしまっている。

マシユにはレイシフトをやってもらわなきゃいけないから、今は何も言わないでおくけれど

——整備班には、お説教ね。

整備班が私の説教から解放されたのは、全体朝礼の5分前だったことは言うまでもない。

全体朝礼と言つても、大したことをする訳じゃない。いつもと同じことを話すだけ。今日に限っては、いつもより少し気を引き締めさせる必要があるとは思うのだけれど、それでも話の内容は変わらない。

何度も同じ話を繰り返し聞かせることで、それが自分の命よりも重い使命なのだと思わせること。

くどいくらいしているこの「講義」の目的はそこにある。

私の命令を、ただ聞くだけの兵隊を作る。

ほとんど洗脳に近いことなのも、人権を侵害しているのも分かっている。私だって、本当はやりたくない。

でも、レフがそう言った。

レフの言葉に、間違いがあつたことはない。レフは、私の為にこんなことを進言した

のだと思う。

彼だって、望んでこんな方法を選んだとは考えにくい。これしか選択肢がないのだ、きつと。

今回の作戦は、絶対に失敗できない。

失敗したら最後、カルデアは解体され、私は誰からも無能の烙印をおされる。その前に、人類の絶滅は避けられない。

どちらにしても、私は全てを失う。

ならば、こんなやり方でも結果さえ出してしまえば、安易に私を裁くことは出来ない。曲がりなりに、人類を救った機関の長なのだから。

いろいろ話が脱線してしまったけれど、今は全体朝礼の最中。私がカルデアの全職員に対して話をする、最後かもしれない機会。

そんな中——私は、困惑している。

「おはよう、なんて挨拶を交わしている場合ではないのは理解していますね？」

今日はレイシフト実行の当日、失敗は許されません。そのことを肝に命じておきなさい

い。」

朝礼の最初、私は普段通りに話し始めた。

少し強い言葉を使ってしまったけれど、未だのほほんとしている者の存在は見過ごせない。これでそういった者がいなくなり作戦がうまくいくのなら、私は嬉しい。

私の言葉に、不服を申し立てるような人間がないことに、少しホツとしている。全員が特異点調査の重要さをきちんと理解していることと、私の命令に疑問を抱かずに従えることが分かった。

そんなことを考えながら、今日の段取りについて話し始める。

すると、私の目の前で船を漕ぎ始めた奴がいることに気が付いた。

何なの、彼は？

あまりにも間拔けな様子に、私は開いた口が塞がらない。

私の目が悪いのかと錯覚してしまうほどの見事な居眠りに、感心さえしてしまったほどだ。

彼はいつもロマニと一緒にいる、一応レイシフトする魔術師の一人だった気がする。

魔術回路などの素質はそこそただけけれど、魔術師としては半人前の、一般枠の只の数合

わせ。

名前は確か——そう、キシナミ。ハクノキシナミだったはず。

私、たった今気を引き締めると言ったばかりよね？なのに、どうしてあいつは緊張感の一片もない顔でいられるの？どうして、居眠りなんかしていられるの？

意味が分からない。私はここ数日、まともな睡眠なんて取れてない。

ストレスと頭痛で、とても眠ってられない。

当たり前だ。

普通の人間なら、こんな状況でストレスを感じない方がおかしい。

い方がおかしい。

彼は異常だ。

人類の命運を背負う重圧を感じていないのか、感じているのに気負っていないのか、あるいは作戦の意味さえ理解できていないのか。

どちらにせよ、彼の無神経さというか凶太さは、極めて異常だと思う。

彼の存在は全体の士気に関わるかもしれない。このまま放っておく訳にもいかない。

彼の方へ歩いていく。

私を通った後の通路沿いに座っていた人は、皆一様に顔を青ざめさせている。そんな

に、私は怒っているように見えるだろうか。私としては、特に表情を作っているつもりはない。

隣に座っているマシユが、彼を起こそうと必死になつて肩を揺すっている。

貴女は本当に優秀だけれど、もう少し人を選ぶべきだと思う。特に世話を焼く人間は。

彼の前に立つ。

「……起きなさい、貴方。」

返事はないが、聞こえているのか体は反応はしている。

よく見ると、目が半開きで睡魔と戦っているのが分かった。

「最後よ。起きなさい、ハクノキシナミ。」

相変わらず、返事はない。

「……そう、なら貴方は要らないわね。」

「！」

私は、彼に決定を言い渡す。

「待って下さい所長！確かに先輩は」

「自分の体調も管理できない素人に構ってあげられる程、私達は暇ではありません。今

日までご苦勞様でした。」

「っ—」

そう言つて、私は踵を返す。ここまで言われては、さしものマシユも食い下がれない。戻り掛け近くに立っていた職員の人に声をかける。

「彼を自室へ連れていきなさい。もうカルデアには必要ないけれど、外に出す訳にはいかないもの。部屋に閉じ込めておいて。」

「はあ……。よろしいのですか?」

男が戸惑うように聞いてくる。

私は、少し声のトーンを落とした。

「何か、問題が?」

男はビクツと肩を震わせて、しよ、承知しました!と言つてもう一人近くの男と一緒に彼を運ぼうとする。

キシナミのことは、彼を認識したときから気に入らなかった。

数日前に起きた、コフィンの誤作動による事故。彼はあれの被害者で、その報告を受けた際に初めて知った。

一般枠最後に滑り込んできた魔術師。本来そこに入るはずだった

彼と同じくらい歳の少年は、カルデアへ向かう途中で不幸に遭ってしまったらしい。

そこへ偶然現れた新しい候補が、岸波ハクノキシナミ白野。

出来すぎているとも思った。まるで、初めから彼が選ばれることが決められていたかのような偶然。

でも、人手がいくらあつても足りなかつたカルデアには、その違和感を考慮する余裕はなかつた。

無個性、と言つてもいいくらい目立たない男だつた。

魔術師としては下の下、最低限の資格しか持つていない。加えて一つも際立つたものが見当たらない、その他大勢に紛れてしまう程の存在感の薄さ。彼の第一印象は最悪だつた。

期待はしていなかつたが、ここまでとは思わなかつたというのが本音だつた。

それが、コフィンの事故の後から何かが変わっている気がした。

具体的には分からないけれど、明らかに周囲の評価が変わつた。あんなに呆けているのに、周りに受け入れられていく彼を見て、何故だか危機感を覚えた。

どこをどう比べても私より優れているところなんて無いのに、地位も立場も魔術師としても、私が負けるはずなのに。

——彼を恐れる感情が、私の中にある。

“どうして”という疑問よりも、“認めたくない”という拒絶の方が強かった私は、彼に当たるようになった。ほとんど八つ当たりのように、毎日怒号を放っていた。まとめて怒られるロマニに少しばかり同情しないでもないけれど、ロマニはロマニで怒られる理由があるので、仕方ない。

あの事故の翌日に、二度とこのようなことがないように注意も兼ねて行つた講義の最中にも、彼は今日のような醜態を私に晒していたのでつい、ハイキックをかましてしまった。

レフには、『病み上がりの負傷者にハイキックをお見舞いするのは、どうかと思うよ』と言われてしまった。

その時は私も反省したのだが、今思えばあの時から彼に対して“恐怖心”を感じていたのかもしれない。

この頃から、頭の痛みが増してきていた。

そんな理不尽な扱いを受けても、彼は怯まなかつた。

毎日のように、私に挨拶をしてきた。

おはようございます、所長と。

どれだけ酷い言葉で罵倒されても、彼はすぐに立ち上がってきた。その姿に、私はよ

り一層恐ろしくなる。その恐ろしさから八つ当たりが激しくなっていく。その不毛な繰り返しが続いた。

それも今日で終わりよ、と心の中で思う。

私が彼に感じていた「恐怖」は、何を言われても全く響かない不屈の精神と、周囲への影響力だ。

要は右の耳から入って左の耳から抜けていく、どうしようもない頭の悪さだと、私は結論付けた。

分かっただけじゃあ、そんなものを恐怖でもなんでもない。

キシナミに肩を貸す形で、左右から支えて立たせようとする職員に、マシユが懸命に訴えていた。

「待って下さい！部屋に閉じ込めるなんて、軟禁と同じじゃないですか！そんなの……」

「マシユ・キリエライト」

「所長……！」

「彼はもう『要らない』と、私は言ったはずよ。彼がいては、現場の雰囲気も悪くなりません。」

貴女は優秀な人材よ、マシユ・キリエライト。そんなのと関わって貴方に悪影響が出るなんて、私は許しません。」

「私は先輩から悪影響なんて受けていません！何を根拠に……」

「マシユ」

彼女の言葉を遮るように話す。

「貴女もカルデアの一員なのだから知っているでしょう。この作戦に、どれだけの責任が伴うのか。彼は、その重要性を全く理解していない。そんな男に、全てを台無しにされたくはありません。」

人類の存続が掛かっているのです。これ以上、駄々をこねるのはやめてちょうだい。」

子供をあやすように、彼女へ言い聞かせる。

その男のことは諦めろ、と。

「……それに、私の命令が聞けない者は必要ありません。この意味、分かるわよね？」
マシユはうつ向いて、何も喋らなくなってしまうた。

「……結構、理解してくれたようで助かるわ。」

以後不服を申し立てる者がいれば、すぐに作戦から外します。これは決定事項です。異論は認めません。」

誰一人、そんな者はいるはずがないと思うけれど。

「何をもたもたしているの、早くその男を連れ出しなさい。」
先程の職員二名が、慌ててキシナミを立たせる。

こんな状況なのに、まだ夢の世界から戻って来れていない。
そんな彼を、私は何も感じずに見送った。

#07 Signs — 災厄の足音 —

気付いた時には、自分の部屋で仰向けに倒れていた。

頭がズキズキと痛みを発していて、自分が固い床に寝ていると分からなかった。

熱にうなされていような、そんな感覚だと思う。

どうして自分が部屋で倒れているのか、それは知っている。

実をいうなら、自分の意識はずっとあったのだ。

所長に声を掛けられた時から、強制的に部屋まで連れていかれたところまで、全て記憶に残っている。

ならば、何故全体朝礼中に居眠りなどしていたのか。

自分は、その経緯を思い起こしていた。

まだ夜も明けない時間にシャワーを浴び、切れてしまった靴紐を取り替えた後、自分

はすぐに寝ようと思っていた。ベッドに潜り込み目を閉じていたのだが、これが思うように寝付けなかった。

原因は、十中八九「悪い予感」のせいだろう。

靴紐が切れた時に感じたもの。それが頭の片隅から離れなかった。

基本的に岸波白野は、「何かの前触れ」であつたり、「不幸の予兆」とかそういう虫の知らせのようなものを信じている人間ではない。

しかし、そういったものに「予感」が付属してくるならば話は別だ。そして、自分の悪い予感というものは嬉しくないことによく当たる。

危険を敏感に感じ取るという側面も持っているので何とも言えないが、今回感じたものはただただ嫌な感じがした。そういうときは、決まって窮地に立たされてきた。

良くないことばかり考えてしまい、あつという間に目が冴えてきてしまった。そうして自分がやっと眠りにつけたのが、なんと午前四時頃。時計のアラームが鳴るまで、残り三時間を切つたところだった。

当然アラーム程度では目覚めるはずもなく、気を利かせて様子を見に来てくれたマシユがいなければ、朝礼には間に合っていなかっただろう。

やはり睡眠時間が足りなかったのか、眠気が覚めず体が鉛のように重く感じた。頭にも霧がかかっているかのような感覚で、部屋着のまま管制室へ向かおうとする始末。

マシユに着替えさせられて――当然マシユは部屋から一時退避して貰った、手を引かれながら通路を走る。その途中、寝惚けていた自分は――

――朝御飯は何、アーチャー？

などの寝言が口から漏れていたらしい。

時間ギリギリで管制室へ辿り着き、手近な空席に並んで座るとすぐに所長が話し始めた。

ここでも睡魔の誘惑が止むことはなく、遂にその誘惑に負けてしまった。といつても、意識だけはハッキリとしていて肉体だけが眠ってしまったかのような形だったが。

マシユの、起きてください先輩、という声も、所長の冷たい通達も、全て聞こえていたのに体が一切動いてくれなかった。

言い訳のように聞こえるが、あの時の自分は指一本動かすことさえ困難だった。その状態で会話はおろか、声をあげることも出来る訳はなかったのだ。

何故そんな状態になっていたのかは分からない。でも、その感覚ならば少しばかり似た経験がある。

生徒会長と太陽の騎士が目の前で月の女王に破れた後、その権能と相対したあの時。

自分は身動き一つ取れずに、戦うことすら出来ず虚数空間に落とされた。状況にも環境にも共通など一切ない筈なのに、何となく似ていると思う。

考えがまとまらず、思考にも統一性がない。端的に言ってしまうえば、支離滅裂だ。

そんな頭の中で、作戦に参加できないという最悪の事態になってしまったことだけが、ぐるぐると回っている。

すると、突然部屋の電気が落ちたと思つたら、

ドンツという大きな音で体が揺らされた。

その音と衝撃で、バラバラだった思考が一斉に霧散する。

———
今のは……!?

何が起こったのか、全く分からない。部屋全体が揺れた気がしたが、カルデアのどこかで爆発が起きたのか。

この部屋には物が少ないので、落ちてきた物で怪我をすることはなかった。

次に、館内放送で警鐘アラートとアナウンスが鳴り始める。

「緊急事態発生。緊急事態発生。」

中央発電所 及び中央管制室にて

大規模な爆発と火災を検知。』

「職員各位は 災害時対応マニュアルに従い

速やかな退館を お願いたします。』

後はこの繰り返し。

やはり、さっきのは爆発だったのか。管制室にはレイシフトに必要な機材がたくさん置いてある上に、自分が巻き込まれた事故の原因であるコフィンが相当数設置されていた。誘爆の危険性は高い。

管制室にいた人々はどうなってしまったのだろうか。

嫌な汗が、止まらない。

「悪い予感」は的中した。

間もなく電気が復旧し、明かりが戻る。これで、管制室へ向かうことは可能だろう。

カルデアの現状を確認するために動くべきか、身の安全の為にここに留まるべきか。この選択を間違えれば、自分の命だけではなく救える命まで見捨てることになってしまう。

う。

その逡巡は、一秒にすら満たなかった。

何も分からないまま終わることだけは、拒絶する。

マシユやロマン、所長もまだ生きているかもしれない。

怖い、と感じる。

目の前の現実を直視したくない。

だが、目を逸らしてはいけないのだ。全てを受け止め、這ってでも前へ進むことを諦めなかった。それが自分がここにいる理由であり、意味でもあるのだ。

———まだ諦めることは出来ない、この体は訴えているのだから……！

早速行動に移す……と思った矢先に、躓いた。

自室のドアが開かないのだ。完全にロックされていて、解除用のパスワードを入力しても駄目だ。恐らく、上位者権限でロックされているのだろう。自分の暗証^{パスワード}番号では、承認されずにはじかれてしまう。

そういえば、と今頃になって思い出す。所長が、閉じ込めておきなさい、なんて言っていた。ということは、所長がこの部屋に鍵を掛けた張本人であるならば、所長以上の権限でなければこのドアの鍵は開かないことになる。だが、カルデアの所長よりも上位者などいるのだろうか？ いたとしても、顔も名前も分からないのではどうしようもない。

所長と連絡を取ればいいが、そんな手段は持っていない。仮に連絡がついたとしても、彼女が自分の頼みを訊いてくれる保障もない。

つまり、完全に手詰まり。これ以上なくらいの八方塞がり。

こうしている間にも、事態は刻一刻と進んでいる。こんなところで足踏みなんて、してられない。

考えろ、考えろ。

今までのしたこと、されたこと、言ったこと、言われたこと、その全てで以て眼前の問題を打破しろ。どんな方法でも構わない。正解なんて、星の数ほどある筈だ。

ドアを破壊する？ 無理だ。自分に、そんな力はない。

冷静さを欠いているのは自覚しているが、瞬時に頭を冷やすなんてことは出来ない。それでも、ここで諦めてしまったら、自分は自分では無くなってしまう気がする。

何よりも、諦めることが出来てしまったら、生徒会の仲間^なに会わせる顔がない……!!

考える

絞_レり出せ

よく考える

捻_レり出せ

もつと深く、考える

思_レい出せ

開かないドア。

外_レせない鍵_{ロック}。

岸_し波_ぶ白_ふ野_んの全_て。

……。

……。

……！

一つだけ、方法を思い付いた。半人前で凡才の魔術師_{ウィザード}自分には難しいけれど、自分にしか出来ないやり方。

『ハッキング』による解錠。

一度だけ、やったことはある。

未熟さ故に、使用した媒体ツールは壊れてしまったけれど。

ドアの側に設置してある端末から靈子ダイブすることは、自分には出来ない。だが、直接ハッキングを仕掛けることは出来る筈だ。

一か八か、試してみるしかない……！

ドア用端末へ右手を突き出し、意識を集中させる。前回のような媒体ツールはないが、贅沢を言っている程状況は良くない。

あの時の感覚を、記憶から引つ張り出す。目を瞑り、端末内に存在する電子世界を想定トレースしていく。

——サーキット・オン
魔術回路、始動。

魔力が魔術回路へと流れ込む。途端に、全身の神経が痛みを伝えてきた。

直感で理解する。

カルデアに来てから習得した現代メイの魔術師イカスの魔術と、目で使っていた未来フューチャーの魔術師ドの魔術は根本から異なるものだ。

燃料となる魔力は同じでも、使う目的が変われば方法も変わる。違う術式を同じ回路で起動することはかなり難しい。箸で米をつまむことは出来ても、お粥を掬うすくのには向いていないのと同じだ。

カルデアで使い、鍛えてきた回路とは、別のほとんど使っていない回路に急に魔力を流したのだ。痛みを覚えるのは当たり前だ。

込める魔力の量を少しずつ増やしていくことで、衰えた魔術回路を無理矢理拵くげている。痛みが頭の中で弾けて、挫けそうになる。左手で右手首を掴み気を紛れさせようとするも、効果はあまり感じられない。

サーキット・フルカウント
魔術回路、臨界点到達。

魔術とは、行使するだけで人間の体に負担をかける。それを限界まで回した場合に生じる苦痛は、最早痛みなどという言葉で形容できるものではなかった。

視界が常に明滅していて、脳が半分吹き飛んだような感覚。

当然だ。錆び付いた回路に、収まりきらない魔力を注いでいるのだから。少しでも気を抜けば、全ての回路を巻き込んで暴発する。正気ではいられない。

—— つ、あと少し。

じわり、と右腕の肘辺りに滴る朱い液体がある。どうやら、回路よりも先に身体が壊れ始めたらしい。右肩から出血していて、その血が垂れてきている。

のだが、何秒前からか忘れたがとうに右腕の感覚など、失って久しく感じた。

—— 掴んだ。

手首まで伝ってきた血液のせいで、左手でうまく右手を抑えられなくなってきた。何かの弾みで跳ね上がれば、その瞬間に右腕は魔力の濁流によって内側から破裂するだろう。

—— つ 挟じ開ける！

なおも溢れ出て疑似神経魔術回路を暴れながら巡る魔力。否、溢れているのではなく、止められないのだ。

魔力を供給する『炉』の蓋が開いたまま閉まらず、魔力を通す『路』ごと飲み込まんとしてゐる。

——あ。

何も見えぬ視界の左半分が、赤く塗り潰された。額の辺りの毛細血管が耐えられなかったようだが、視覚は意味のないものになっていたので大して困りはしない。

強いて言うのなら、顔はまだ触覚が生きているので若干の気持ち悪さがあることか。どうにもこの生温さは、生理的に受け付けられない、というよりも肌で感じる本物の血液の生々しさに慣れていないだけか。

——いい、加減につ

いつの間にか、膝から下の感覚が無くなっていた。まだ脚が身体と繋がっているのか、確認するのが恐い。身体の一部が喪失ロストするのはこれで二度目だが、何度体験してもなれる気がしない。

この時だけは、視界の不良を有り難く思った。

砕けろッ!!

パカンという軽い音が、終わりの合図だった。

ハッキングは成功、と言っているのか判断に迷うが、一先ずは部屋の鍵を解除することが出来た。ドア用のコンソール端末は過負荷によって破壊してしまったが、代償としては少ない方だろう。

このドアが、閉まることはもうない。鍵だけでなく、ドアとしての機能そのものを圧殺したのだ。当然の帰結と言える。

多分凜やラニ、レオ、ユリウスならば、自分の暗証番号パスコードに管理者権限を付与するなり、そもそも鍵を外すくらいロックのことは可能なだろうけれど。

どうしてそんな方法を取ったのか。

答えは単純、『自分にそんな器用なことは出来ない』からだ。

ハッキング用の媒体があるのならまだしも、本来ハッキング可能な環境ですらないのに、自分のような半人前に搦め手など使える訳もなく、純粹に力技で押し切るしか

かったのだ。

魔術回路を限界まで回して、ひたすらに魔力をぶつけ続けるといふ、いかにも脳筋と
リミット
 いった戦法で。 “魔力の手” で、錠前を握り潰すイメージだ。

方法はともかく、無事に部屋から脱出することが叶い、軽く安堵の溜め息をついた。
 身体の損傷も、改めて診てみれば皮膚のすぐ下の血管が切れていただけで、軽傷と言
 える。額の出血も、もう止まっていた。

右腕と足の感覚も戻ってきている。まだ少し浮わっている気もするが、走る分には
 問題はなさそうだ。流石に、全力疾走などしようとはおもわないが。

この程度ならば、放置しても問題はないだろう。

左手で顔についた血を拭いながら、運動前の準備運動のように足首を回しどのくらい
 動けるのかを確認する。

痛っ

どちらかと言えば、全身の魔術回路を無理して拵げすぎたことによる痛みの方が深刻
 だ。

ただでさえ身体に大きな負担のかかる魔術行使を、全開の魔力で、しかも塞がりかけ

て細くなった回路で強行したのだ。意識を向けただけで身体が熱を持つほど魔術回路が傷んでしまっていただけでなく、魔術師としての回路もガタが来ていた。

まあ、全ての回路が焼き切れて使い物にならなくなかなかただけ、マシンなのかもしれない。

さらに自力で行うハッキングは初めて同然だった為か、魔力の加減が分からず無駄に垂れ流してしまったのは否めない。

自分の決して多くはない魔力貯蔵量の大半を持っていかれた上に、魔力回路は半壊し、使おうとするだけで身体中に痛みが走る。

諸々を考えて、魔術を行使できるのはあと数回が良いところだろう。

それよりも今は、中央管制室へ急ぐのが先だ。

意識を切り替えて、部屋を出た。

自室から管制室までの道のりはそう遠くない。むしろ近い。

今目指しているのは『中央管制室』と言われている、カルデアで最も大きな規模を誇

る『管制区画』の一つだ。

『管制区画』とは他の区画の管理・制御という役割を担っている。

この『管制区画』は特殊な構造をしていて、他区画が一ヶ所に固まって配置されているのに対し、『研究区管制室』や『居住区管制室』などのそれぞれの区画に一つずつ点状にしている。

その全ての『管制区画』を統括する『中央管制室』は文字通りカルデアの中心部に位置する、いわば「カルデアの頭脳」とも言える場所なのだ。

同時に、『中央管制室』で爆発が起き火災が発生しているのなら、その「頭脳」を失ったカルデアはほとんどの機能を十全に扱えないことを示していた。

カルデア中央にあるというのは、必然的にあらゆる区画からの距離が均一化されることになる。それに加えて、どの区画からも『中央管制室』へ直通の一本道が開通しているので、歩いてても五分もかからずに着く。

その通路を中央管制室に向かって行く途中で、自分は立ち往生していた。

自室を出てから一分も経っていないのに、膝が悲鳴をあげてしまい壁に寄り掛かって

いる。思ったよりも、身体の疲労が蓄積していたようだ。

魔力とは、生命力である。生きる為の力と言い替えても良い。

それを半分以上使ってしまったので、今の自分にはたつた五分程度歩くだけの力
すらないのだ。正確には身体へのダメージもあるのだが、それを差し引いてもこの体た
らく。

頭では前へ進もうとしているのに、体が全くついてきてくれない。このままでは、中
央管制室へ辿り着くことなど到底不可能だ。そうなれば、少なくとも命を失うことにな
る。

まだ上手く動かせない右手で、足を叩く。

ここで、立ち止まる暇などない。

ここで、終わる訳にはいかない。

ここで諦めることなど、出来る筈がない！

自分の体に鞭を打ち、何とか歩き出す。幸か不幸か、心はまだ折れていないのだ。

ならば進める。この足はまだ動く。

再びサーキット魔術回路を励起させる。身体が内側から焼かれるような気分になるが、構ってい
る時間はない。残り少ない生命力まりよくを足へ注ぎ、無理矢理サーキット魔術回路を回すことで動きを止
めないようにする。こうでもしなければ、すぐにでも倒れてしまいそうだ。

アラート
警鐘の内容がさつきと違うことに、ふと気が付いた。

歩くのを止めずに、その声に耳を傾ける。

『『中央区画』の 被害甚大。』

被害の拡大を防ぐ為 中央区画の隔壁を

90秒後に 閉鎖されます。』

『職員は 第2ゲートより

速やかに退避してください。』

『繰り返します。』

『中央区画』の 被害甚大。 ……』

どうやら、『中央区画』からの被害拡大を抑える為に隔壁を降ろすらしい。いよいよ時間との戦いになってきた。

『中央区画』なんて呼称されているのだから、『中央管制室』も含まれているのだろう。今自分のいる場所は『中央区画』の中に入っているのかは分からないが、逃げるのなら間に合うかもしれない。

『中央管制室』まで行って帰ってくるだけでも、隔壁閉鎖までに間に合うのか見当がつかない。戻るなら今だと、冷静に考える自分がいる。こんな体で行ったところで、役に立つのか。どうせ生存者などいないのだから、逃げたってバチは当たらない。

自分の“弱い部分”が、どんどん大きくなって囁いてくる。

“投げ出してしまえ”と。

“諦めてしまえ”と。

……………。

その逡巡は、やはり一秒にも満たない。

自己満足でもいい。偽善者で結構。自分のような俗物には、潔く諦めること “こそ” 似合わない。

かつて、自分のことを“奏者”と呼び慕ってくれた彼女の言葉^{セリバ}を思い出す。

“最も強い願いが残るのではない。”

最後まで残った願いこそが、最も美しいのだ。”

ならば、最後まで足掻いてみよう。

どんなに生き汚くても、しがみついても残ってみせよう。

弱音を全て吐き捨てて、一心に進み続ける。

たとえ生存者が一人もいなくても、隔壁が閉じてしまったとしても、自分がここで引き返す理由にはならない。先のことは、その時考えればいい。

不思議と気持ちりが軽い。いつの間にか、走り出していた。足への負担は感じない。感じないだけで、負担は掛かっているのかもしれない。

それでも、この足は止まらなかつた。

中央管制室の入口が見えてきた頃には、足の感覚がハッキリと分かるくらいまで回復していた。もう魔術回路を回す必要もないだろう。その魔術回路の方も、身体の痛みはほぼなくなつたと言えるほどに調子が良くなっている。というより、都合が良すぎるくらいだ。

こんなに早く走れるようになるほどの消耗だっただろうか。壊れかけの魔術回路が治るなど、ありえるのか。

自分の身体に何となく違和感を感じたが、一旦頭の片隅に追いやる。

……目の前のことに、集中しなければ。

——と、ここで思わぬ人物と遭遇した。

「岸波くん!?!何やってるんだ!?!」